財嚢を搾る有馬を兵庫縣下の京都とするならば、唐櫃は慥に八瀬であらう。京都の人情の浮薄なる以上に有馬の人情は浮薄であり、叡山に寄生せる洛北民が今猶古調な風俗を存してゐる如うに、六甲に巣くへる甲北村民にも一種往古の風習が殘つてゐるかに思はれる。それは兎に角、幾百年に亘つて幾千萬の人力に築き上げられた羅馬が一朝にして滅んだ如く、幾多先人の血に培はれた平氏は一頼朝に亡ぼされたが、紫電先づ輝きて而る後、迅雷の轟く限り惡運の將に來らんとする前には必ず豫感のある筈である。秦の始皇も夙に自家の滅亡を豫感した。然し驕りの目は物を逆觀する。始皇は内なる禍根を外に觀て萬里の長城を築き上げ、清盛は己が專横を恐れずして、地震大風、火事、水害に悸き、福原遷都、では無い遁都をさせた所以である。然し流石にネロの末裔とか傳はれて居るだけに、文學を好み音樂を愛し歌舞宴遊に耽つて而も詩人的情調も豊かであつた。大原女の風俗を此村に輸入して、婦は細帶を前に結び草履脚袢で、荷物を頭に戴いて「黒文字買はしやんせんかいな」「柴買はんせんかいな」

と、振賣り〳〵尻振り〳〵福原の市街をノソリ〳〵と歩かせてゐたのも、彼が趣味性の發露であつた。それに唐櫃村も八瀬や大原の如うに縉紳から里子を預からねばならなくなつたらしい。併し遽しく出た水は遽しく退いて了ふ。俄作りの福原の都はまだ四ヶ月も經たぬ間に元の京へ逆戻つて了つた。彼の羅馬のネロ帝の聯想される平安最後の花形役者清盛を思ひ平氏を思うて義仲や義經に想到する時、羅馬と羅馬を滅した蠻族との關係が思ひ浮ぶ。それに唐櫃村へ輸入された八瀬女、大原女の風習と、貴公子預りとは其の後久しく續いてゐたとか。今に「聞いてたもれ」とか「和御寮何處からおはさつた」とか「これ見てたもれ」などゝいふ老獪な男女のゐるのは「あはれ」「をかし」な中古の生活や「かの木の丸殿もかくやと、なか〳〵やうかはりて、優なるかたも侍りき」などゝ京童、では無い京男の皮肉つた内裡の光景も偲ばれる。

『此處は清盛に縁故があるらしいですが、この山越えた彼の皇居の在つた地名の福原が、今日遊廓の名になつてゐるのは不埒ではありませんか。』

M君はだしぬけに斯う叫んだ。

『そら帝王の居室に名けた青樓が妓樓の名になつてゐるからなあ。』

『青樓は帝王の居室の名ですか。』

『古人の詩話に、齊武帝于興光樓上、施青漆、謂之青樓、乃帝王之居。故曹植の詩に「青樓臨大路」駱賓王の詩に「大道青樓十二重」とあるからなあ。梁の劉邈の詩に「倡女不勝愁結束下青樓」とあるのが、妓樓を青樓と稱した始めらしい。』

『つまり支那人は青、翠、紅等の文字皆物の奇麗なる事に用うるを常としてゐるから、婦人の居る所を稱するより轉じ來つて終に妓樓を青樓と云ふことになつたのでせうね。唐詩に、「閨中少婦不知愁春日凝粧上翠樓」の如き翠の字など全く婦人の綠から用ゐたやうですから。』

『支那は元來、老毀れると岱赭色とか茶褐色となり、凝つて燃えたつと赤となる黃土國で、和名之を赤縣と稱した。隨つて支那人は赤人である。言ふまでもなく赤は

女性色で弱いところに限りなき强味を含んで居るが、日本は男性色の青であつて强さうで脆い。後者は易の所謂健々不息の乾の國、前者は自彊不退の坤の國だ。』

『謂はゞ日本は全體が山岳であり、支那は其の儘曠原ですからね。』

『だが赤色の支那が綠色の日本と相卽互入してゐる間は、兩國もまあ無事だらうが、赤色が亞米色に變色したり、青色が魯赭色や腐爛崇色に化つては了つては困つたものだよ。』

這麼ことを語合つてると、「平清盛祈願所」と彫んだ眞新な碑文が目の前に現れた「萬年山寶塔寺」の古い碑文も傍に佇つてゐる。此の新舊兩碑文から少し隔つた右手に可なり長い石段がある。石段を上つた衝き當りに見える白壁が寶塔寺の塀らしい。

僕は一同と共に早速參詣して見ると、五間四方の松材のお龕末な本堂も、三間四面の護摩堂も密閉されて、亭々たる老松が單り境內に羽振を利かせてゐる。

『惡鬼羅刹も正月休みと見えて、調伏方の毘沙門天も休業なのだね。』

Y君は呟いた。

『坊主が又首を縊つてゐるのぢやないかしら……』

戸の隙目から切りと堂内を覗いてゐたM君、傍のY君を顧みて、

『怎うも暗くて判らないが、此寺の先住は、「小衲儀病氣全快、無事出獄仕候得共御羨み被降間敷候」と遺書いてブランコ往生を遂つたとか傳ふことだせ。』

と語る。YMの戯言が面白い。

『其の實、何月何日首縊る旨を豫告して、香奠を集め、絶筆遺墨の濫造强賣を行り了せて、イザと迫つてから自殺を見合せたのぢやないかな。』

『さすが眞言坊主だけに、そんな虚言は吐かなかつたよ。』

『それこそ却つて虚言ぢやないか。何故つてM君！自殺せうと思つて豫告して置いても、イザとなつて生命が惜しくなつたら見合せるのが眞實だからね。虚空の雲が地上の花と共に刻々色を化へ姿を變へる此の世界では、水の流れと共に人の心も遷

流して已まないものだ。豫告する時と實行する時とは、時日の異る如く考も變つて來なければ虚偽ぢやないか。』

『ぢや豫告通り實行する者こそ已れを欺き他を欺いてゐる譯かね。』

『謂はゞ詐偽行爲だよ。無論有形か無形か何か其處に獵物があるに決まつてゐるのだ。つまり爾うした獲物の爲に眞實を犧牲にしてゐるのだよ。と言つて少しも豫告を履行しない人間は最初から虚偽を吐いて居るのだが……』

『併しM君の言ふ此寺の先住は坊主だてら、首を縊つたりしないで、何故もつと樂で見つとも好い讃經自殺を試らなかつたのかね。』

『讃經自殺とは？』

『因果經を聞いて讃嘆の念を生ずれば可いのだ。何故それが自殺かつて君！「聞此經生誹謗念者舌卽墮落」とある因果經を、聞いて誹謗の念を生ずる者ほど舌が達者だから、讃嘆したら却つて舌が墮落るだらうぢやないか。はゝゝゝ』

八八　腥さ坊主の呪ひは精進堅固の高僧の祈りである

『誰方も何卒此方へ……』

酒に頬照た此寺の世話方らしい五十男が、一同を招びに來た。一同揃つてゾロゾロ庫裡へ入つて行くと、庫裡の大廣間には大きな机を置いて酒肴が盛り上げられてゐる。乃し酒合戰が酣らしい。首を縊つたのぢやないかとM君が心配してゐた住職は、

『オヤ先生！御機嫌さん……』

僕の顔を見るなり座を起つて來て奥へ案内して呉れる。意外にも住職は船場の眞言寺にゐた快活で洒落で元氣な若僧である。

『先生、高野山で三年も苛められた揚句の果に、恁麽仕樣も無い寺院へ放り込まれて困つてまんね。』

『金も無い癖に高野山などに三年も居た罰ぢやないかね。イヤ顛娯ぢやないよ。有

馬溫泉ですら貧乏人は寄付けないからね、而も況んや寓銀貨溫泉をやだはゝゝゝ』

『阿呆らしい！私等は、氷を浴び、イヤ寒夜に曝した汚置きの水の氷を拳固で破つて、一菜一食で、事相敎相を腹に叩き込み、三密瑜伽の業を修つたのですせ。十八道から兩部曼陀羅、儀軌は勿論、觀法觀念に骨を折りましたせ。』

『山中、冷水を浴て觀念三昧に入る、それに上越す避暑法もあるまいぢやないか。』

『有駄々々言ひなはんな。寒中の苦行だすがな……』

『それぢや御祈禱は能う利くだらうね。』

『そら對者が本當に信仰して呉れやはつたら、直ぐ効驗を顯はして見せますが、そやなけりやあきまへん。』

『すると赤ン坊の病氣には絶對に駄目な譯だな。』

『そんな無茶言うて貰ふたら、どうもならん、此寺へは女が餘計參りますが。とちらかと云ふと、赤ン坊の病氣祈禱が主だすよつてな。』

『イヤ相變らず元氣で結構だ。或は君は、女人解禁になつた時、イの一番に高野へ登つた女人の末孫ぢやないかね。尤も今は解放とも何とも言はぬ先から、飛歩いてゐる女人が多いけれどなあ。はゝゝゝ』

『エロー女人に攻撃つて居られますが、其癖男さんばかりで一體何處へ行きやはりまんのや。』

『大勢の赤ン坊が死にかけてるんで、六甲山中へ御祈禱に來たのだよ。』

『六甲山中で御祈禱……山中の何の邊で行りやはるんだす?』

『それをこれから捜しに行くのだ。どうだね一緒に行つちやあ。』

『大勢の赤ン坊て、皆さんのお子達だんのか。』

『お子達でもあり、親達でもあり、又皆さんでもあるのだ。』

『へエ……』

『實は大鹿中齋の墓が六甲山にあると聞いたので、それを捜しに來たのだよ。』

『あゝさうだつか。併し其墓なら船坂の方やおまへんか、わたえも船場に居つた頃さう云ふ事を聞いとりましたんで、此寺へ來てから村の人に尋ねて見ましたら、其墓や船坂と甲山の間やらうと應つてた者がおましたせ。』

『イヤ四五年前、わたしや唐櫃の方で見やしたんで……』

何にも言はずにゐた虎公、毅つと斯う叫んだ。

『わたしも昨年の秋、はつきり其墓を見たんです。』

巳のやんもやんわり應援する。

『それやあんた方の見違ひでせう。私は先祖代々此村に住んで居ますが、其麼ことは聞いたこともありませんがな。』

世話方はキッパリと否定する。

『ナンせ此の人(世話方)は役の行者に隨いてゐた前鬼後鬼の子孫で、先祖が大和の後鬼村から此村へ移住しやはつたのやし、今でも山伏で年闘年中山へ入つてゐる

人だすさかえな。』

住職は世話方の否定に裏書をした。

『それが燈臺下暗しと云ふんぢや御座んせんかな。』

虎公は目の色變へて猛然と反抗いた。

『ナーニ西郷戰爭頃までは、私家から火を興らぬと、山神の祟りを受けると云うて誰一人唐櫃を越すものがなかつた位、私家と唐櫃は緣が深い。それに私は子供の時分から何度唐櫃へ入つたか知れませんから、そんな墓があれば目に觸かなけりやならんのです。』

世話方は徹頭徹尾反抗する。

『しかし君！僕宅へ來る寺の世話方に、南海の住吉神社の境内に先祖代々住んでゐる男がある。何日だつたか、その男に、住吉の燈籠の數を問ふたら「奈良の鹿の數は分つても高野の墓の數と住吉の石燈籠の數は分りませんな」と云ふから、「其麼に

澤山な石燈籠は全體誰が獻げたのかね」と質くと「一々名前は彫つてあるやうですが、どんな名前か一つも氣がつきません」と答ひよつたからなあ。』

世話方の執拗い否定に大頓挫を來さんとする、一同の意氣を盛り返すべく、僕が斯う云ふと、

『イヤ私は唐櫃六甲の事なら、豪さうに云ふや御座んせんが、何方にも負けは取らん了見です。』

世話方はいよ〳〵ムキになり出した。

『大鹽の墓が見つかつたからつて、大鹽山中齋寺を建てゝ御祈禱屋を營りやしないから、其麼に商賣敵の如うに言は無くたつて可いさ。』

『隱亡をつかまへて產婆を賴みやしないからまあ安心し給へ。』

『摩擦の阿爺に腦髓の根本原理を尋ねやしないからね。はゝゝゝ』

MYも一同の士氣を沮喪させてはと氣遣つたのか、這樣ことを言つて世話方を嘲殺

せうとする。

『イヤ有難い！世話方君。若しも中齋先生の墓が發見されたら早速此寺へ御禮に來るよ。兎に角、此の寺の世話方たる君が住職諸共、斯うして我々を鞭韃して呉れられた深甚なる御厚意は感謝するよ。』

斯う言つて僕が一同を促して立上りかけると、

『先生！御一同の爲に御災難除けの御祈禱をしますから……』

と、住職は云ふ。

『それや甚だ迷惑だよ。何卒我々にドエライ災難が降り注るやうに祈つて置いて呉れ玉へ……何が阿呆らしいことがあるものか。一生懸命に呪つてゐて呉れ玉へ何故つて君！腥さ坊主の呪ひは精進堅固の高僧の御祈禱と同じだからね。』

『はゝゝゝ仕樣も無い……』

氣散じな住職は笑ひながら、起つて別室へ入つたが、やがて一幅の古い軸物を取

出して來て皆の前へ披げた。其幅は密畫密彩の清盛の肖像である。

『清盛は希臘人だとか、羅馬人だとか傳ふ說があるやうですが、成程、此像を見ますると、怎うも日本人では無さゝうですね。』

住職は飛んでも無いことを質き出した。

『そら源軍の爲に扼止されて海中の藻屑と化つて了つたけれども、平家が逆境に陷るや否や、一門殘らず海路を西へ、鳴物入で日本を去らうとしたのは事實だし、清盛の海路工事や福原遷都も爾うした時の準備だつたのかも知れないが、萬一すると却て生粹の日本人だつたのかも知れないよ。

『先生！文化虫對山化虫の御諷刺の如うですね。それとも勞資係爭問題若しくば男女の鬪爭を諷して居らつしやるのですかね。』

『イヤ平氏が沒落前には、いろんな奇怪事が降つて來て音樂が流行つたが、西海に沒した平氏の亡靈が復活したのか、西國から勤王の志士が蹶起して、東國の幕軍を

滅ぼした明治革新前には、御幣さんが降つて全國民は「えぢやないか踊り」に狂つたらしいが、「幸福の爲の端書」が降つて、舞踏に有頂天になつて居る國の前途が氣遣はれるぢやないかね。』

怪訝な顔して聞いて居た住職は、何か發見でもしたかの如うに、慌しく叫んだ。

『さうすると、ロスキーのやうに聞いとりました大江山の酒呑童子を、和蘭人であつたやうに云ふ人がおますが、マンザラ嘘でもないのですかいな。』

『頼光は刀の精だとか云ふ事だから、和蘭の精かも知れないね。』

『和蘭の精ちうと……』

『又の名は享樂といつてね。性欲の凝塊だよ。』

『和蘭人といへば阿具利とか名ふ有馬の湯女と夫婦になつて、加留母とか稱ふ女の子を産んだとか傳ふ宣教師が、御維新前に唐櫃村に住んで居たさうですせ。』

暫く默つて居た世話方が突然斯麽言を言つて僕の答へを促した。

『其の湯女は宣教師が死んでから、富山の賣藥行商人と一緒になつて、久しく丹波綾部郡の五箇莊村とかに住んでゐたが、後、巡禮と六十六部になつて諸國を巡り大坂へも出て木津に居つたとか傳ふ天理教のおみき婆さんの師匠だとか傳ふ西班牙人の事ではないかね。』

『イヤさうかも知れません。我家の死んだ婆さんが何でも其麽話をして居たかと思ひます。私の母はおみき婆さんの生れた近村で生れましたのやし、父は行者で、おみき婆さんとも懇意だつたものですから、或はさうした事情を聞いて居たのかも知れません。』

『併し、加留母の先夫だつた宣教師は和蘭人に化けてゐたらしいが、實は西班牙人だつたらしいのだ。和蘭人はゼウスを信じて居ても布教はしないといふので三代將軍時代から通商を許されてゐたのだからね。』

『イヤおみき婆さんが加留母から貰つて供物にし、信者に與へて居たとかいふ金米

糖は、西班牙の菓子ださうですし、例の神樂踊も西班牙の古代の踊りに手を付けたのださうですからね。神樂歌なども怎うせ讃美歌を模字つたのでせうよ。』

『それに「神は眞なり道なり」の基督の言葉や約翰の言つた「道」の意味から「眞道彌廣言知女命」と命名たのだし、日本の天帝天滿自在天神の紋章たる梅鉢を徽章にしたこと、甘露臺は地上の天國を意味したことや、十柱の神の中の雲讀命が昇天の基督であり、超世の願では無い「世界一列」は博愛を意味し、最後の審判を「世界の立換へ」殉教的犧牲心を「人助けの爲に谷底に陷れ」と意譯したのだからな。尤もそれは天輪王の命時代のことで、それがその後、天理教と變じ、更に奠論教と墮つて了つた如うだが……』

斯う曰つて僕は振返つて見ると、背後に居た筈の贅疣團は一人も居ない。

『怎うしたのだらう？』

僕が訝ふと、

『ボッ〳〵戸外へ出て行きましたよ。』

と呟きながら虎公と己のやんは起ちかける。贅疣團を呼び戻しに出かけるらしい。YMと一緒に僕も此等を辭して戸外へ出ると、凧が横倒ふしに吹きつけて僅かに殘つた銀杏の枯葉をふるひ落してゐる中に、微懼ともしないで鵜が止まつてゐる。贅疣團は昔、此村へ里子に來て居た貴公子が金銀の鷄を埋めたとか云ふ山へ其の泣き聲を聞きに行つたとか。今日が其鷄を埋めた當日で、泣き聲が聞えるとて、毎年村民は聞きに行くとか云ふことである。結城の城址に九十九萬本の黃金の棒が埋まつてあるとか、地中に金の生る木があつて、吉野の何處やらと阿波の何處とかへ枝を出してゐる。都合で何處へでも枝を伸ばさせるとか、大阪市中の何處やらに三千萬圓とかの正金が埋もつてゐると云へば、一夜の間に一宗が樹立する世の中、天地金の神に金を磨く紫團とか、金比羅さんとか、金の字さへ付けたら歡迎る金禍本位の此節には、持つて來いの名所ではないか。僕は何故爾うした名所見物人を連れて來たかと、又そろ

そろと悔い出した。併し、金を借りて責立てられた者で無いと、返濟す刹那の嬉しさでは解らない。彼等の身になつて考へてやると、己れ自身の精神衝動からで無く、全く他人の衝動に動かされてゐるのであるから、苦勞をしたところで、自分がそれによつて滿足することは能きないであらう、他人の精神衝動の犧牲となり、自らの意志を抑へてゐる彼等は今日の筋肉勞働者若しくは下級の精神勞働者同樣、思へば氣の毒の極みで無いか。それに一時の感激に附和雷同した連中に何日迄も緊張しろといつてもそれは無理である。厭氣はさしたが志願兵の餘義なさに、澁々跟隨いて來るのは寧ろ傷ましいことではないか。それにつけてもY君、M君には感謝の念を拂はずには居れない。MYに求道心があればこそ、僕の憧憬がMYの刺擊となり、僕の感興がMYの疲勞を助け得るのである。而もMYに在つては向上的努力その儘が無限歡喜であるらしい。然し、僕に斯うしたことを氣付かしめたのは贅疣團の態度そのものである。MYの緊張は彼等の苦痛であり、YMの躍進は彼等の困憊であることによつて僕はYM

の光を見ることが能きたからだ。浮薄に見えるY青年の本質が如何に摯實であり、鑄型に箝つて居るかに思はれるM青年が鑄型を破つてゐるかゞ窺ひ得られたのは辱けない。僕は前に孔子を大盜と讃へた。中齋、翔鶩を巨賊と崇め、無病息災な人間には身體が無いと言つたこともある。眞の貞女は夫の存在を忘れ、眞の孝子は父母の存在を忘れてゐる如うに、爾した人達の目には一人の歸依者も映じなかつたに相違ない。歸依者を自分に奪つてゐるからである。僕がYMを自分に奪つて居るのでなければ僕がYMに攝取されて居るのであらう。僕にはYMの姿が無い。YMの目にも恐らく僕の姿は映じないであらう。YMは狐鼠泥であり僕亦草賊であらうか。然しだ。基督は、彼れの弟子に解せられずして、僧侶ゝ支配者と富者の方が、能く基督を理解したのではないか。理解したなればこそ、殺したのではないか。眞の理解者は離背者の中に在らねばならない、贅疣團、或は肉身團であるかも知れないぞ。

斯麼ことを思ひながら藤屋と名ふ百姓片手の旅籠屋兼ゝ度所へ腰を据ゑた。肉身團

を待合す爲であつた。併し贅疣團の歸つて來た時は、日は西へ傾いて居た。一同此屋に宿ることにして明日の活動に資すべく宵寢をやつた。

八九　湯槽ケ谷の鬼

斯くて一同は翌朝早昧に宿を出て元の寶塔寺の建つてあつたといふ古寺山の頂上に辿りついて、此處からいよ〳〵探索に取りかゝる。勿論それ〴〵部署を定め、嚴重に手分けして、佛ケ谷、行者谷、桂ケ谷、ナバ谷、中谷、逢ケ谷、白谷、横谷、湯槽ケ谷などいふ、櫟、楢、槇、栗などの濶葉を混じた赤松の深林や、扁柏と杉との混淆喬林の谷々を、縱横無盡に驅け摺り廻つた。迂濶と深い穴に陷込んで「アッ！」と叫んだ途端にパッと下から飛び行く鳥は何鳥かと見る間に何處へか雲霞、殘雪と氷に爛けた足を荊棘に傷けられて泣き顏をする男もあれば、蔦の根を蛇かと思つて膽を冷やす男もあつて、逢ケ谷から湯槽ケ谷にかけて深林に突入突出、熊笹の根を分け荊棘や

枯草叢を探して見たが、墓は愚か、何等さうした痕跡すらも見當らなかつたのである。

大勢の勢子が、全一日山林を駈けずり廻つても兎一匹狩り出し得なかつた失望が、言はず語らず一同の心を支配してゐたらしい。それでも僕は士氣を鼓舞すべく、大いに前途の有望な事を語つて見たが、口答へもせず、謹んで聞いて呉れるだけ、それだけ賴りない感を僕は受取つたのである。僕に對して從順なだけ、それだけ衆の公憤は、虎公の一身に集まり、憐むべき虎公は、終に一同の怨府となつたらしい。

『虎公！貴樣が、いろんな事を吐かすから、俺等も正月早々、こんな酷い目に會はにやならぬ事になつたんだ、墓を見たなんて、まつたくの嘘だらう……嘘なら嘘と早く吐かさぬか、ヤイ吐かさんか。』

斯うした荒詮議が彼等の間に初つた。

『イエ、たしかに此の邊で見たのですがなあ、何分五六年前の事ではあるし、それに其の後何遍か見に來ても、ネッから見附からぬのですからなあ、嘘と云はれたつ

て申譯がありませんや。』

虎公は平然として斯う答へるのであつた。其の言葉に一味の眞實がある如うではあるが、何より墓の無いのが證據、キツパリ嘘と白狀せぬ限り、虎公の平然たる態度が極めてズウ〳〵しく見えたので、一同の激昂はいよ〳〵昂じて、ガヤ〳〵と喧囂き立てる。氣の荒い壯漢が一人、虎公に咬みつかんばかりの勢で、

『コラ虎公！馬鹿にするねえ！』

言つたかと思ふと、いきなり鐵拳をグワンと喰はせる。

『ウヌ……』

とばかり、流石に虎公激したが、肝瘤玉をグッと臍下に押込み、

『こゝだ〳〵。これが先生に會はぬ先の虎公だつたら、容赦は出來ねえところだが大きな灸を點えられて、既う善い子に化つた俺やあ、酒より好きな喧嘩は彼の時から廢業ちやつたのだ……諾矣、俺が毆られて、手前等の腹が癒るなら、毆れ毆

れ！金輪際毆つて呉れ！俺が毆られて！苦多破つたら、この湯槽ヶ谷の鬼になつて、俺が確實に見た其の墓の所在を、夢枕に立つてでも、先生に敎へてやる哩。さあ毆れ！、毆つて呉れ……』

啖呵を切つて、双肌脱ぎ、胴堅下と大地に胡座を跌いた。

『吐かしたなッ！』

『やつゝけろッ！』

叫ふより早く破落〳〵と鐵拳の雨が虎公の上に降ちた時、ヂーッと今まで成行を見てゐた僕は、もう堪らず飛んで行つた。

一同が斯の如うな亂暴を働いて居る處は、ツイ目睫間と思はれるのに、韋駄天を以て許された僕の健脚で、幾ら走つても〳〵行き着かぬこそ不思議なれ。

『オーイ待つて呉れ〳〵』

と聲打嗄らして走つても〳〵、距離は依然として同じことなので、僕は氣がいよい

よ焦躁つくばかり。

『コラ待たぬかッ！』

大喝一聲すると、一同は、

『ソラ中齋の幽靈が來たぞッ！』

と叫んで蜘蛛の子を散らした如うに逃げて行く。あとに血海泥になつた虎公が、嬉しさうに僕の顏を見仰げて莞爾したかと思ふと、バタリ其處へ打倒れた一刹那、忽ち大地が二つに裂けて、僕は底知れぬ深底に墜ちて了つた。と思ふところで、目を覺ませば、是れなん探索に疲れ果てゝ、巖に蹲踞つたまゝの居眠りに、危くも結んだ一場の夢であつた。

『先生！既うお目が覺めましたか、此の谷も矢つ張駄目なやうです。豫定通り、頂上まで搜つゝけませうかな。』

目を擦ると、夢の中には一向出て來なかつたY君とM君が僕の前に佇つてゐる。

九〇　諸諚を解せぬ女は妻たるの資格が無い

『一同は墓を見つからなかつた爲に、勇氣いよ〳〵凜々たるものがある。』

とYMが報告して呉れた時、山の雜木林を紅く染めてゐる美しい夕陽を遙望めて、僕は斯う答つた。

『日の暮れかゝる前は、遲かに明るくなるものだねえ。』

心が讀めなかつたか何うか、MYは又もや甲斐々々しく先導して進む。晝猶闇き深林に差しかゝつた時、僕は徐ろに一同を諭して、もう探墓の第一豫定線を超えたのだこれから先、いよ〳〵有望の度を加へて來ると共に、また危險の度も甚だしくなるから、歸つた方が可いと慫慂した。しかし誰一人「それでは歸りましやう」と申出る者が無かつたが、彼森へわたり此峰を越えて更に二十町ばかり、六甲の最高峰の頂點近き、身長以上の熊笹に包まれた山腹の蜘蛛ヶ岩――これは土中から露出せる奇巖に心

經が鐫りつけてあつて、多聞寺の先住の發起だと謂ふ――に達した時、
『先生が、あれほど言はれるから、ちやあお辭しやうぢやないか。』
到頭本音を吐く者があつた。
周圍は不氣味なムードに包まれて白刃の如うな風が凍え切つた五體を縱横十文字に
劈く如うな心地がする。
『こゝまで來て、見付けずに歸るのは惜しい事ぢやなあ。』
『そんなら、何處までも跟いて御座らつしやれ！』
と云つたら、義理にも勇み立ち得さうな者は、一人も見かけられぬのに拘らず、未
練がましく斯う裝ふ者もあつたが、餘人は兎も角、先達と賴んだ虎公、巳のやんも加
はつた、結局十一人の贅疣團は、僕等三人を殘して、此處から下山することになつた。
斯うなる事は、最初から分り過ぎる程、僕には分つてゐたが、YMには驚心駭目的
な意外であつたらしい。

『君等も一緒に下山したら怎うだね。』
と僕が揶揄ふと、二人は又意外にも、
『先生！それや本當ですかな。』
と來た。諧謔が眞面目を以て酬いられた譯である。その糞眞面目に對しては、僕と
雖も勢ひ半眞面目位にはならざるを得ない。
『本當だとも！墓探しは實際僕一人で澤山だ。君等も瘦我慢を張らずに、彼等と一
緒に歸つた方が、君等の爲には勿論、僕の爲にも好いのだ。』
キッパリと言ひ切つたが、僕の心では、半は依然として諧謔であつた、所が反響は
いよ〳〵僕に不利なるものであつた。
『ぢやあ濟みませんが、これで私共もお暇いたします。まあ隨分お氣をつけられ
て……』
と、Y君が云ふと、

『お怪我の無いやうに、危い山路を辿る時に、どうぞ稲荷の辻占が悪かつた事を忘れにならないやうに……』

と又、M君も言つた。

『ナーニ「宅は之れトするに非ず、唯隣、これトするなり」と古人も曰つてるから我が身の事よりも連の心をトふことを忘れ玉ふな。』

『イヤ先生！御縁があつたらまたお目にかかりましやうが、若し不幸にして、墓が見つからうものなら、先生は必度發狂して、一生墓の周圍を廻つてゐられるのでしやう。』

『そんな下らぬお附合ひは眞ッ平御免。ちやあ、左樣なら……』

MYが眞顏になつて交る〳〵斯樣挨拶をする。冗談ぢやないぞ、今の今まで心に頼み切つてゐた二人、股肱とも、兩脇侍とも、鳥の双翼とも車の兩輪とも信じ切つてゐたYとMは、今無情くも僕を見棄てやうとするのである。事が餘りに意外である。又

突如として起つたので、僕は殆ど急に秩序を失つた頭腦の混亂を整理するの術を知らなかつた。思へば口は禍の門である。僕の一言の過ちから、僕はいよ〳〵一人ボッチになつた。しかし駟も舌に及ばず、一度言つた事を取消すのも男らしくなければ、詮方盡きて兜を脱いで降參するのは更に女々しい。況や未だ詮方の全く盡きたりと云ふにもあらざるに於てをやだ。斯うなつたら僕も意地だ、職工のストライキに、縱令工場が潰れやうが、斷じて妥協を肯じない工場主の金聲よろしく、必死を覺悟して、僕は流石に一言の愚痴も溜はなかつた。

『ちやあ御苦勞でした。君等もよく氣を注けて歸り給へ！』

勿論喧嘩別れではなく、又寸毫も感情を害してゐる譯ではない。其處は男性同志だから、心事は玲瓏として綺麗なものだ。これが若し異性の間柄であつたならば、正しく感情の衝突、思想の誤解から離緣となるところである。つら〳〵以るに、禍の濫觴は最初僕が諧謔を弄した了見なのが、それを先方には糞眞面目で答へたといふ所

に存する。して見ると諧謔を解せぬ女は、人妻となる資格の、重要なる部分を缺いでゐると云つてよい。併し近代に於ては、男性が大分軟化して、斯うした誤解衝突の場合に、男だてら忽ち女性化して、アベコベに妻君に詫を入れる。御機嫌をとる。大いにヤニ下るに客ならざるものがあるから、天下は何處までも太平である。

さていよ〳〵別れるといふ一段になつて、僕の主唱で、

『大鹽先生萬歳……』

を三唱した。その聲は谺に響いて、何處か、其處等邊りに、鎮座まします中齋の靈に通じてゐるかの如く、折からの木枯さへ、何となく靈のいぶきかの樣に物凄く感じられた。すると引續きYMの首唱で、

『〇〇先生萬歳……』

が、一同によりて三唱されたので、僕は一寸面喰つた。而して南と北の二路に別れたが、先方は大勢、僕は一人、見返る眼、呼びかはす聲、感慨は實に無量であつた。

時も時、懸崖の如くしばし西の空にたゆたうてゐた夕日が、既う半ば地平線から隱れて、その唐紅の色は大分朽ちかゝつて來た。所謂暮色蒼然として到つた頃ではあるし、僕と雖も言ひ知れぬ凄慘の感に打たれて、恐ろしく心細かつたことは、殘念ながら事實である。

九一　怪しの一つ火

『しかし僕が何か大惡事を働いて追手を避けてゐるのであつたら、怎麽時に却つて心が沈着くのであらうが、否、斯う云ふ時には周圍の草木までが敵となり、惡魔と化つて僕を根こんぞ責苛むであらうのに、善事どころか惡事すら行はれない無能無力が幸福となつて、斯うした夕暮の山景が宛ら墨畫の卷物かに見えるではないか。』

實際負惜みで無く、地上に蹲踞まつて心を沈着けると、淋しい底に、又、斯うした喜びも湧き上つて來た。しかし、星影も漏らさぬ曇帳の張られた空に、夜の黑幕が覆

つては、盲ならぬ身の悲しさ。辛うじて認められてゐた一脈の山徑も分らなくなるだらうと驚いて上ち立つたが、既うそれは遅かつた。一歩々々谷に下り林に入るのであるから暗いとも暗い。さて斯うなると今迄は何とも思はなかつた金剛杖が、何よりも頼もしくなつた。極道息子を有つた了見で、譏らうが、瞞さうが、縱令殺しに來ると しても悅んで死んで遣らうと、怎麽厄介をかけに來やうとも、會も會知れぬ難事を擔ぎ出しても、天與の公案と心得て、根こんぞ面倒を見て遣つても、人間といふものは一寸した感情の行違ひで直ぐと離れる。無論それは愛子に對する悲母の態度と等しく畢竟自己の愛欲を逞うしたのに過ぎぬので、對者に取つてはそれが結局不幸の種子となつてゐるのかも知れない。否、知れないどころの騷ぎぢやない。僕は多くの人を躓かせてゐる。傷けてゐる。害ねて居るのだ。害を加へて置きながら恩を施したかの如うに思ひ込める無意識的罪惡、謂はゞ徹底的大罪惡の爲に、此儘墓にせられるのかも知れない。然し僕としては、沈香も炷けず屁も放れぬ僕としては、却てそれが幸福

だ。思へば此の探墓行は自ら營んだ自己の葬式であつたのだ。全體僕の如うな人間は生まれて來なかつた方が可かつたのである。而も自然に反逆した器械生活より遁れて自然に適應した眞純生活に憧憬れながら一切を抛つて山に遁れ全地を滅亡させる念力も無ければ都會の惡濁に浸り込んで俗を抱いて心中する程の勇氣も無く、徒らに自他兩面の罪惡に想到して無益な煩悶を重ね、生命の濫費を事としてゐる我身を顧みる時、如何に厚顏無恥の僕と雖も、我吾を葬らずには居られない。それにしても石に削げて傷けたり樹を擲打つて損ねたりして、酷使虐待してゐた此の金剛杖は、進退谷まつた僕をも捨てず、唯一無二の味方となつて呉れてゐる。僕は斯く思ふと心の底から感謝の念が燃え立つて來る。そして金剛杖を撫でゝやりたくなつた。四五丁を降つて漸つと左右に貫つた山徑へ辿りついた時には天地は黑團々の暗で一寸先も見えなくなつた。一足踏みかぶれば底知れない谷底に轉げ落ちるので、そろりそろりと覺束なくも恐々足を運んでゐると、一點の怪光が遙か對方から人魂の如うに

飛んで來る、凝視すると刀を腰に差した大男が手にせる灯であるらしい。それが僕に近づく程速力を早めて、宛ら韋駄天かと思はれる。此奴テッキリ山賊に相違無いと、傍の大樹の後へ身を匿した僕が、山賊が今し大樹の前に近づかんとする刹那、恐怖の餘り大喝一聲、

『コリヤ！』

と叫んで躍り出ると、山賊は忽ち其處へ平太張つたと同時に、怪火はパッタリ消えちやつた。

『南無阿彌陀佛々々々々々々』

と唱ふる慄え聲は老人の皺嗄聲である。

僕は意外な感がして傍へ近付きかけると何かしら足に觸つたものがある。手に取つて熟視すると、鋲力製の蠟燭ランプであつた。怪火と見えたのは此だつたのかと、僕は自分の怯懦に驚いた。然し蠟燭は殆どたつて了つてゐる。山賊はと見ると、果して

好々爺であつた。僕は只管に其の不禮を謝して好々爺を劬つた。聞けば好々爺が韋駄天走りの原因は、蠟燭のたゝぬ間に人家を見つけたいからであつた。摩耶山詣での歸りに、路を迷うてこんな方へ來たとの事、途中日が暮れて山中の水車小屋で提灯を借つたのだが、蠟燭がつかひさしのたゝ一本しか無かつたとか。僕は今更に惡魔は自己内心の幻影である。而も刹那の勇氣は恐怖の結晶であり、安心とは恐怖の反動以外には存しないといふことを痛感せざるを得なかつた。しかし僕の遠眼に山賊と映じた好々爺も、好々爺の面前に山賊と見はれた僕も、互に思ひ設けぬ道伴れを得たのを喜んだ、而も此の時、行手にあたつて、チラと燈火が仄見えたのは、言ひ難き懷しさを覺えしめた。それが縱令外國人は愚か、仇敵の家から漏れた光であつても、闇夜の燈ほと、旅人の心を慰めるものはない。

漸く辿り着いたのは果して米國商人の別莊であつた。生半可な英語を操つてヒケを取るよりも、こゝは一番日本語で、國威を發揮してやらうと思ひついた僕は、門口か

らイキナリ、

『オイ、日本人の家は此の邊に無いか。』

と叫んだ。缺舌が中から聞えるかと思ひきや優しいジャパニース・ウーマンの聲であつたのは、聊か拍子抜けの氣味であつた。

『ハイ、今時分何方へ被行しやいますか、こゝはね、外人村ですが、その下の右の道を眞つ直ぐに未申に取つて行かれますと、左手に大きな記念碑が建つてゐます、その記念碑から少し行きますと、郵便局があります、郵便局の隣りに一軒茶屋があります……』

と叮寧に敎へて呉れるのであつた。ラシヤメンか、但しはベビアマか、聲の主の詮議は僕の利害に關せぬ事と、今度はアベコベに、

『Thank you very much』

と洒落れて其處を辭せんとすると、好々爺は蠟燭の無心を云つてゐる。僕も提灯を

借つて好々爺と左と右に分れ、敎へられた道を進むと、風はますゝ荒吹くが空は聊か明るくなつて來たやうで、行く手の丘上に、記念碑やうの一大石柱が仄見える。僕は何の記念碑であるかと其石柱に近付くと、碑の兩面からヌッと顯れた人影二つ、思ひかけぬから慄然とした僕の心は、次で聞えた聲によつて歡喜に躍つたのであつた。

『先生、今晩は……』

唐櫃六甲の頂上から、大勢と一緒に歸つた筈のYMが、間道を拔けて、早くも此の處に駈けつけて、僕の來るのを待つてゐたと云ふ。これで悲劇は喜劇と化して三人は大笑ひ。この時の二人は、僕に取つて從前に倍して、新しく貴く、また懷しきものであつた。雲は破れて八日の月は美しい顏を見せた。

九二　外人村から洞窟へ

外人村の戸數は七十五戸あると云ふが、此崖に一戸、彼山に一戸と、離れ〳〵の平屋建で、烈風を防ぐ爲とて土坡を築いて折角の見晴しを遮り、グラウンドを拵へる爲にとてあたら樹木どころか草までも拔き取つてゐるが、兎に角、地の利と勝を占めた別天地で、神戸、横濱などの居留地に見られぬかくれたる歐米の氣分が漂うてゐたのが、世界大戰以來、本國へ還つて了つたものも多く、今では大半日本人の住宅となつてゐると聞いて、僕の幼時內地雜居論の喧しかつた明治の中葉時代に於ける國民の對外思想が、何れほど幼稚であつたかを語り聞かせると、兩君は腹を抱えて笑つた。

斯くて三人は近くの茶店に宿を取つた。翌朝起き出でゝ山の端から双眼鏡で西南を眺めると、神戸兵庫は縹渺たる海の對方に烟の如う。僕れば三十年の昔であるが、僕の居つた當時の神戸はまだ幼稚な市街であつた。居留地、榮町、海岸其他、謂はゞ當時の外人村を除くの外は古呆けた市街であつた。煤けた中に木や紙の與ふる溫かな柔かな氣分も味はれたが、何とそれが怎うだらう、石造、煉瓦造、コンクリート、ペン

キ塗りの洋風建築や、バラック普請、亞鉛屋根などが、古調な日本建を壓倒して、今は昔の神戸ぢやない、一漁村の小野濱や並木の中の相生村の昔から傳はつてゐた眞純素朴さは愚かな事、西國三十三州の米權を握つてゐたと云ふ兵庫の昔氣質も、殖民地氣質、流浪民根性に埋漏れて、たゞもうイヤに慌しく、薄氣味惡い、何だか噴火山頂に鬼女のダンスでも見てゐるやうな心地がする。湊川近くの林間の六角堂が湊川神社と云ふ熱騷場と化し、森閑たりし生田の森が生き馬の目拔きの雜鬧地と變つて、如何な古跡も歷史的情緒と共に葬り、文雅も趣致も自然の寂味と共に根絶つた。謂はゞ日本の上海である。石炭の上に火輪を轟かす北九州の一角を除いては、キャピタリストを手古摺らせるプロレタリストの本場である。小野小町を偲ばせてゐた深艸道など、清盛が榮華の蹟諸共に絶無つた。改造か、改葬か、分列と鬪爭に忠なる現代に持つて來いの改造市街、嘗ては伊藤公の銅像を市中引廻しの上糞壺へ投込み、再昨秋は寵商の店舗と共に豪奢の鼻柱を挫き、先頃又デカい造船所を呑まして飛沫を全國に波及した。

「兄貴や神戸の牛殺し」なる諺が「父は長柄の人柱」てふ童謡に取つて代るに不思議があらうか。僕は神戸の現狀を見て三十年前を顧ると、死んで地獄へ生れ代つて前世の夢を見てる如うな氣がしてならない。

とは云ふものゝ晝猶黑き石炭から夜尙明きダイヤモンドの出る如うに、多恨の美人、多情の英雄と結び付いた詩的情緒の豐なる由緒ある都を化して、不潔と犯罪と僞善を包容む牢獄と變じ、古來の英雄が弱者を外的に暴壓したのとは異つて、人間を內的に細分して其本質を搾奪し、もと〳〵喜びであつた筈の勞働を死か勞働かの苦痛あらしむる工場と變ずる、器械將軍の跳梁する科學大明神の跋扈地たる斯うした利己的な、資本主義的產業萬能の中心地帶に、却つて麵麭の外の麵麭卽ち正義や愛や讃仰の索たる靈の光が、赫灼として輝き出づるのではあるまいか。

然し、殘月白き朝ぼらけに靄を漕ぐ漁舟の外に、目を遮るものとては、たま〳〵飛び交ふ水鳥ばかりであつた小野濱にスクーナー、ケッチ等の橫帆船から、バーク、バ

ーカンチン等の橫縱帆船、ブリック、フルリグドシップ等の縱帆船の舷々相當り、舳々相次げる今に猶、和船本位の兵庫港、久しか振りに先頃下神の砌、其港頭の夕に佇つた僕は、そゞろ心を搖がせられた。墨繪の如うに遠く橫はる防波堤の燈火や、遠近の舷燈が濃霧に浸染み、曇り勝ちの空に瞬く星の幽光が、亡き母、逝しき子の魂の如うに思はれて、不覺の涙を水と空との間に濺がざるを得なかつた。消え行く船の笛の音が泌み〴〵と身に迫るのであつた。

それはさて昨夜見た記念碑、僕等三人の爲にも、再會の記念となつた其の碑を今朝新しく見て、明治三十八年英人グルームが、初めて此の地の草開きをしたことが分つた。

して見ると、日本在來の特種部落に比して、更に〳〵後進部落であらねばならぬ。彼等の有する八十五町歩に亘るゴルフ場は、彼等の生活の餘裕を示して餘りあるが、しかし村としては從來は勿論、將來と雖も、それほど發展するやうには思はれない。

『幾世紀かの後、平家の落人と云ふ五家村のやうなものになつて了はねばよいが……』

とM君が、他人の疝氣を頭痛に病んだのも可笑しい。

ワイ〳〵連が居なくなつて、モトの水入らずの同行三人、談興動もすれば最高潮まで沸騰するのであつたが、目的を達するまでは、餘り與太るのも、山靈に對して憚りありと、今日はひたすらに山路を急いだ甲斐あつて、昨日の道を逆戻り、山の背を傳うて三千〇五十尺といふ有馬六甲の頂上に立つた時の心地快さ。西方には播丹の山山、河泉の峰巒が海の東西に薄紫にぼかされて、夢のやうに溶けてゐる。寒氣に凍てた地層からはぼか〳〵と湯氣が上つて、青く芽ぐんだ草の葉は、生々と天地と戰ふ勢である。嵐に身顫ひしながら、生々と呼吸をしてゐる。

『此前此山へ來ました時は、まだ貧乏を知らない時で、蠹駄師を連れて庭樹を探しに來たのだから、自然に對する親しみなんてありやしなかつた。金の爲に心が割られ

て居たのだらう。山よりも海よりも他の別莊や別莊地ばかり目に觸いたからなあ、つまり金を變形させてそれを凝視めて居たのだ。』

『併し、今日の山岳は何だか倉庫を藏する倉庫ではないかね。官有林、私有林といふ樹木の倉庫ではないか。史は詩也と評はれる事程、左樣に日本歴史の美化されたのは、秋の瀨戸内海が平家を、春の吉野が南朝を彩つたからでもあるが、その吉野方面の、殖林地帶に行つて見ると、樹皮を剝いで一々所有者の名前が記いてあるので、「これは〳〵」と呆れるよ。「溪聲是算盤音。山岳豈非商業地」かね。はゝゝゝ』

MYが斯樣對話をいつて笑つてゐる。と道が左右に岐れて來て、忽ち行手に迷はしめる。大地の底から滲み出る水の如うに内部から湧き上つて來る止めて止まらぬ求道心と、身邊を圍繞する幾多の羈絆とが兩頭の蛇の如うに、相嚙み、相爭ふ自己の心の象徴ではあるまいかなど思はせる。進んで超然孤高の態度も取れず退いて和光同塵たる能はざる自分を省みざるを得ない。やがて三人は針の如うな東風に吹かれながら、

殘雪に斑白な谷々を經廻つて、中齋の墓の所在を探つて行つた。籔や枯芦に蔽はれた大石小石を踏んで太古の匂ひに陶醉される。谿谷の精に助けられ山神の加護に依るのか否やは知らず身體はます〳〵元氣活氣に滿ちて來る。しかし林木から來る雪解けの水に浸りながら谷を渡り丘を越え、足に任せて、深く〳〵奥へ〳〵と入つて行つた。然し、方角すら分らなくなつても遂に出られ無くなりはしないかなど云ふやうな心持は生らない。歸りの栞して置かうといふやうな心の生らうはずもない。裏六甲の深林中、最も奥らしく想はれる人寰を遠ざかつた幽邃な鬱林中に、人の十數人も入れる洞窟がある。丹後の經ケ崎邊りの山中や丹後との境などには、今尚花咲爺やカチ〳〵山の婆さんが住んで居るとか傳ふことだが、萬一としたら中齋黨の子孫でも、と僕は雀躍しながら先に立つて窟内へ入つて見たが、子猿一疋見當らない。洞穴は中で窄んで奥は一層廣びやかである、

『怎うです先生！此世ながらの棺槨として此窟に幽棲する事にしては如何でせう。

斯うした靜な境域に、たゞ三人住むことの寂しい深い樂しさは他にありますまいせと串戲半分にY君が曰ふと、M君は眞顔になつて、

『イヤ私も宅を出ましてから、漸つと今心が沈着きました。イヤ數年間、念つてゐた沈着が今漸つと得られた如うな心地がします。實際私は何時も悲哀に襲はれてゐるものですから如何かしてそれから逃避したいと焦慮つて居た爲に、却つて悲哀に取憑かれてゐたのかも知れませぬ。沙漠の果の夕闇を目的も無く一人淋しくテクつてゐる如うな淋しさが感じられるので、方向變換をやらうと思つて何ぼ道を轉じても同じところへ出るのです。久しく光を求むべく力めて居た了見が、却つて光を蔽ふ陰が色濃くなつて來るので自分自身が頼り無くなつたのです。私は救ひか、亡びか、どちらかに決まらないと埒があかないのです。或は救はれやうとするから亡ぶるのかも知れませんが、どうも亡びやうとは思はれないですからね。』

『併し、復活の前には亡びが無くてはならないではないか。眞の光明は無明の極に

輝くものだ。ボーロが羅馬の獄中に認めた書翰は地の果にまで讀まれたし、言を立てんが爲に、士大夫の最も屈辱とする腐刑を受けて、奴隷と雖も引決すべきを尙且隱忍苟活したればこそ、司馬遷の立言も、天下を照明することが能きたのだ。華山が獄中から椿山に送つた消息、ベエトオブエンがテレサに献げた手紙の如うに唯一人に宛てた生命をかけて、盡きぬ涙の暗室に窓漏る星の光りに認められた文で無いと、言葉でないと、寢言、空言、多話怪言ではないか。』

『然し、私は眞實をいふほど對者に惡解されるし、さりとて言はねば誤解から脱れることが能きぬと云ふ言ふにいはれぬ破目に陷つて居るのです。』

斯う曰つて、端坐して默禱に耽つた。僕が默つて禪定に入つてゐるからでもあらう。易の所謂「有言不信尙口乃窮也」で、言へば殺され、言はねば救はれない。と云つた如うなヂレンマに、悶えてゐるらしきM君の姿が、何だか佛像の如うな感がして、寵内は崇嚴と凄愴に彩られた。死人の如うに身動きもせねば物も言はなかつたY君

が、煙草を吸はんとてマッチを摺ると、傍の凹所に石佛が佇つてゐるのが目に觸いた。熟視すると一光三尊の彌陀である。然し、同じ一光三尊でも、善光寺如來は支那の亡命者が念持佛で、寸八の閻浮檀金像とかで、幾重かの厨子に入つてゐるが、此處のは粗朴な石像で身長五尺もあるだらう。それに强か塵埃を浴びたまうて、蜘蛛の巣にとぢこめられ玉ふ。「日本最初の渡來佛は金銅の裸體佛（誕生佛）で次に彌勒の石像であると傳ふが、前者は支那、朝鮮を透過した印度佛で、後者は西域、支那を透過した佛敎像であると思はれる。併し、三度目に輸入されたと傳ふ善光寺如來は佛敎を透過した基督像と云つても可いと思ふのである。それは彌陀本願の思想は中央亞細亞に發達した易理の詩化されたので、希臘に流れて易は神話と化り、波斯に入つた易は拜火敎と化り、更に印度に傳つて印度敎と化り、猶太に入りて猶太敎と化つたのだ。而もナザレに宗敎の淸泉と湧き上り、雅典に美しき藝術の花と薫り、加毘羅城裡に眞理の光明と閃いたが、善光寺如來は爾うした宗敎、藝術、哲學

の綜合され陶鑄され精錬された理想の像であるからだ。僕が斯うした意味から基督教の、佛教のと、何等信仰の本質と交渉の無い形式に捉はれて虚偽と知らざる虚偽、偶像と氣付かざる偶像に縛られてゐる或る男に、善光寺如來は其の實基督像であることを諷言つてやつたことがある。スルト其の後もの〻半月ばかり經つてから、其の男は血相變へて遣つて來て、

『君は人を欺したな、怪しからぬ。』

と怒鳴るのであつた。そして昂奮の餘りに身を慄して、後の文句を繼ぎ得ないいぢらしさに、僕は謙つて、

『惡い事があれば謝罪るから、落着いて仔細を語るやうにと、注意した。さて聞いて見ると、イヤハヤ驚いた。其の男は御苦勞千萬にも、僕の一言の諷喩を眞に受けて、態々信州くんだりまで、佛像を見に行つたといふのであつた。秘佛だから見せられぬと云ふのを、さてこそ聞いた通りの基督像だから、其故で見せぬものと早合

點して、手摺大望をして種々運動の結果、漸つと見せて貰つたが、矢張り本尊は阿彌陀の一光三尊如來であつたので、呆れて物が言へなかつたと云ふことである。あ己みなん〳〵詩人に非ざれば詩を献ずることなかれとか、迂ッ濶、串戯を言つた爲に寢首を掻かれるやうな物騷な世の中、信仰の對象を、單に佛像の形式に問うて、敢て自家信心の眞僞深淺を反省しやうとせぬが當世であるらしい。何日やらも、或る日宗僧が日蓮が地下に冷汗を流してゐるとも知らず、晩年身延に入山して懺悔につとめてゐた若氣の失策を、日蓮の眞生命なるかの如くに妄信して、譯も無く餘宗殊に念佛を罵つて己まぬから、「君は爾う叫ふけれども、日蓮は寸八の彌陀像を、不絶懷中にしのばせて念持佛としてゐたのだ。現に其像が身延山の奥の院に奥深く祀り込められてゐるぢやないか。それに横に讀めば六字の名號が頭字になる彌陀の十八願文の隱括された皆歸妙法の遺文をも秘藏して居るとか傳ふではないか。」と、日蓮が歸依奉信した壽量本佛は、文句を通じて眞正面から觀た彌陀佛であり、彌陀佛

は文句を離れて斜に眺めた壽量本佛であるとの意を諷諭してやると、僧は何う解したものか憤々として席を蹴つて驅け出したが、其の後ろ影が、淨土眞宗の宗義の中心を絶對自力と叫んだ能登の頓成を異安心と排擊した當時の役僧を聯想させたことが思ひ浮んだよ。』

斯うした意味の話をYMにして聞かせると、

『爾う承はると、此の石佛の三尊が何かしら顔回左に侍り子貢右に侍つた孔子の像にも見えますね。』と、Y君はお出でなさる。

『孔子を右に、柳下惠を左にした盜跖とも、達磨と寶誌とに挾まれた武帝とも、光秀、五右衞門に前後より引立てられた豐公とも髑髏丘上の三盜賊とも見えるであらう。篤と見れば中央は中齋、左右は釋迦、耶蘇なのだが……』

僕が應ふと、YMは「はゝゝゝ」と笑つた。

谷を出で谿を脱けて山の尾へかへつて來た時には夕日の影が西方不可見界に沈んで

夜の黑刷毛が刻々神の光筆畫たる自然を塗抹さうとする。ドカ〳〵氣溫は低下して厚着の僕ですら堪へがたきにと、YMを見やれば平氣の平左であるらしいのが、僕に寒さうな素振を見せまじとの我慢に見えるのだ、僕は心窃かに泣かざるを得なかつた。

YMの胸の中には舊臘來の仕ごとが一バイつまつて居るのではなからうか。若い妻君はもとより、可憐な子供は日々山を望んで、歸りを待詫びつらん、老母は定めし心配して居らう。家に變つたことは無きやなど、案じ煩へるかにも思はれる。イヤ親を忘れ、妻子を忘れ、身を忘れて今では僕に身を任せて居るらしい。Y君の泥濘保の登山靴が、雪に爛れて眞つ赤になつた兩脚を思はせる。ボト〳〵に濡れたM君の衣服が凍死者の肌を偲ばせる。YMは覺らずして僕の爲に臂どころか生命まで裂いても厭はぬらしく思はれて、僕はYMの爲に死んでもやりたい氣になつた。僕はYMが心の底から可愛くなつた。YMに對する考へも次第々々に變つて來た。まだ〳〵變つて來るだらう。怎麽人間でも斯うだ彼あだと斷定らるべきものではない。怎う云ふ人間か分

らないが、分れると淋しく感ずる人は知己である。世界中の人間は刻々變化する自己自身の影である。而も刻々の變化其の物が永久に變らない自己の生命なのではないか世間を去つて斯うした所に久しく居ると世間が莫迦に戀しくなることを思ふと、僕の目に映じ來り映じ去る社會の罪惡は、僕それ自身の心相であることが分つて來る。僕は内心の缺陥を外に見て戰慄いて居るのではないか。つまり僕自身の問題である。縱令他から怎麽に迫害されやうとも、それは自分の罪である。總て他より自分に加へられることは、悉く自分の罪である。人、眞に罪を犯した時は、却つて他から加へられたかに思はれる、如何なる災害も、如何なる壓迫も、如何なる恥辱も自分に罪なくして來るものではない。他を怨み天を怨む者ほど、罪障は深いのだ。僕は何故かYMの人と爲りが次第々々に崇高く見える。而もそれがYMの眞相であるかに思へて來た。僕とYMとは今が初對面だ。これまで會つて會はなかつたのである。數年前から知つてゐたY君とも會つて居なかつた。實際Y君が呑氣に見えてゐるのは堪へられぬ淋し

さと、悲しさと、怖ろしさと、腹立しさの變形たることが痛感されて來た。彼は世に恐ろしき不平漢だ。彼の讀易もそれから逃れやうとする無自覺的要求だ。いよ〳〵堪へられなくなつた時、僕の所へ來るのであらう。彼の頓狂聲は涙腺破裂の響かも知れない、耳鳥齋やドーミエの畫が單なる滑稽に見え、ドンキホーテが譯もなく可笑しく感ぜられるのは、彼等に取つては保護色である。彼麽に眞劍な人間は、他から滑稽に思はれるところに生かされてゐるのである。Y君の態度が何となく滑稽に見えるのは君が眞面目過ぎるからだ。しかし人が氣狂ひだと思ふほどの情熱は無い。「自分は、藝術を生むことによつて救はれる。衒氣慢氣、肉臭俗臭のトルストイも、自己の作品に救はれた。生れながらの犯罪者たる親鸞も自作和讃に、造惡心の燃燒を消止め〳〵し」たではないか。」などと、創作に勵んだ時代もあるらしいが、彼には藝術家に通有した全身の能力が何時も或る一つ事に凝集する燃燒質が足りない。どだい、鍵で扉は開きはするが、中へ入らうとはしない。物を見詰めやうとしないで趣味性に墮して了ふ傾

きがある。然し、離縁つた妻には未練が殘る。何でも一度破つたものは諦めがつかぬ無い。引裂いたり、拋遺けたりするのは餘りに其物を愛するからだ。といつてそれ以上、力が無いと其物に進入つても行けないが、一度藝術の畑に入つて幾度も自作を破り棄てたY君は、終生藝術の圈外に去ることは能きぬであらう。而も最初の事は最後の事である。藝術から實業へ移つたY君は、今、藝術を攻擊して居るが、內心の要求は攻擊の姿、排斥の色を以つて選擇される、一度、鑑眞が齎持した四分律に心を傾け、大安寺行表に道璿傳來の北禪を授かつた寂澄は、已が祖先の地たる支那に入つて歸來、大乘圓密戒を以て寧樂の舌僧攻擊に一生を費したが、その內容實質は四分律的であり、北禪的であり舌僧的であつた。幼時より姫孔、老莊の敎を學び周詩楚賦を修め、十八歲の時、一沙門より虛空藏求聞持法を得て豐瞽指歸を著し、姫孔老莊を偏膚なりとして、佛陀の敎旨を鼓吹した弘法は、言ふまでもなく兵法の代りに儀軌を以てし、言說を以て刀鎗に代へた緇衣の英雄ではあるが、又烏帽子を冠り袈裟を纏ふた儒、道二敎

の發揮者では無かつたか。ブルジュワ生活は恐か、能ふべくんば貴族生活がしたいと念掛ける者ほど、貧民や勞働者に同情したらしい言を述つて居るではないか。進んで猛虎に五體を喰はせる人間は、己れの生命を繼ぐ爲には、我兒をも殺して食ひ兼ねない人間だらう。

斯うした考慮に幻を拔かしてゐた僕が、我に返つて見ると、YMは寒さうに、淋しさうにしてゐる。チラ〳〵雪が降つて來た。何處か宿るところを相談すると、少し下つた峠の絕頂に一軒茶屋があるのであるが、冬期は閉されて人も居無いとか。といつて、東西南北向いても人家がありさうにも思はれない。此處から東數丁行くと、船坂六甲の頂上に達する、其頂には白山權現祠があるとのことゆゑ、行つて見た。小さな石の祠であるが、三人僅かに膝を容れ得る拜殿がある。僕等は怎うしても一夜を其の御加護の下に過ごさねばならぬ運命を有つてゐるのである。白山權現とは死の神であらうか、神は盡なり進なりで古賢の所謂形動いて形を生せずして影を生ず、聲動いて聲

を生ぜずして響を生ず、無動いて無を生ぜずして有を生ず、形は必ず終りあれど無には終りが無い。死は有終より無終に入るの門であり、老子の所謂「精神歸其門骨骸反其根」列子の所謂「精神離形各歸其冥故謂之鬼鬼歸也」であつて、我等が永遠の故郷に歸る門かのやうな心地もする。不圖堂外を見ると、矗々として天心を刺した大樹の下谷に臨んだ懸崖の端に衝つ立つた後ろ姿はY君らしいが、何かしら蕭白が畫き損つた菩提樹下の釋尊然たる感じをさせる。枯葉は天鵞に飜へり、紫色の夜霧が四邊を染めて、姿を見せずに何鳥か鳴いてゐる。「石崖に小便すればチンコロリン、」秋水を拔いて來たY君が、こんな妙句を口吟みつゝ歸つて來たのに徵しても、萬象凍る山頂の冷たさ、寂しさが察せられやう。夜の更くるまゝに月も凍つて色蒼く、星は慄えて落ちさうだ。眞つ白い雪を封じ込めた眞ッ黒い峯嶺は宛ら白骨の塔と見えて物凄い。僕の見る所、一として生氣ある物はない、一切の物が死んでゐる。凍えてゐる。默してゐる僕の分身とも云ふべきYMすら鼾もかゝず死體の如うに横はつて仕舞つた。あゝもう

地球の末期が來たのではあるまいか。而して僕こそ最後に殘された一人の人類なのであるまいか。

斯う考へて來ると、想は電光の如く幾萬年の過去に馳せ、人生の始端を成すアダムと、人生の終端に立つてゐる僕と遙に相對して、其間に起つた中間事象、即ち人類一切の活動、國家の興亡、文明の進歩、結婚と戰爭と、英雄と美人と、疾病と死と而して出生と、その間に流された喜怒哀樂の何々、生存の競爭、成金と貧窮、帝王と奴隷世々に亘る歡樂のオーケストラ、政治と工業と宗教のあらゆる現象等を一目に見渡して、その總計は是れ有か、是れ空かと問答して見たが、一向に要領を得ない。彼には子孫であり、僕には祖先である全人類の如是活動と其の意義が、如何なるものであるとしても、其の一切は今や僕の一身によつて「けり」が決くのであると思へば、僕は急に「人類大の責任」の重荷に壓せられた心地になつたが、しかし今更何と焦躁つても、何う跼いても、僕は畢竟僕である。思ひ煩ふことによりて身長一分延ばす譯にも

行かぬ。この儘にして、有りの儘にして、大人しく凍死して天命に服するの外はあるまいものと、觀念したのであつた。アダムは何か意味あり氣な顔をして僕を凝視める其の顔が僕を警戒してゐるやうにも見え、又叱つてゐるやうにも、慰めてゐるやうにも、憐んでゐるやうにも、さまざまに見えるので、僕の心の平靜は又あやしく搔き亂された。見まじとして眼を背くれば、そむけた方にアダムの、意味あり氣な顔が現れて、何事かの解決を迫るのであつた。右に向いても、左に向いても、上にも下にも、前にも後にも、終には目を瞑つてゐても、アダムの顔は限り無く、僕を追窮して已まぬ加速度に混亂を增して來た僕の心理狀態は、さながら千八百則の公案を、一時に透斷せよと强要されてゐるかの如う。斯うなつたら、もう堪らぬ、本當に氣が狂ふのだと思ふた刹那、忽ち五體が大地に投げ付けられた。山が動いたからである。此の時、對方の谷から噴き出す火燄の柱は天を焦して凄じとも凄じ、見る、見る、火燄の柱は二つに裂る。三つに分る。四つに割る。八つに散る。距離は遠いが火の粉がだん〳〵近

く僕の身に逼つて來る。起たうとしたが身體が萎縮んで微動とも能きない。逃げやうにも八方悉く火である。斯く猛烈なる自然の威力に壓倒されては萬事休焉、聲さへ立て得ぬ阿鼻地獄、忽ち聞く死そのものに由つて絞り出されたやうな大叫喚、是れ我の聲か、我の聲と聞く時、何とも言へぬ大苦叫大悲鳴であるが、神の聲と聞く時、正しく慈悲救拯の愛音である。あゝ正に極苦極痛のドン底に抱擁する神人の結婚か。一念茲に達して、天國此土を去ること遠からず、大苦の中、大樂存し、地獄の破れて淨土出現するの妙理は忽ち四周の火柱を吹き消し、山嶽の鳴動を靜め、何時の間にやら蓮華花咲き香風薫じ、紫雲靉靆きて妙樂嘲嘲たる淨土の光景が展開してゐる。

『あ、僕はいよ〳〵死んで極樂に來たのだな。』

九五　天地創造の神

須らく歡喜すべく感謝すべき筈の往生極樂が、何故か、僕には一向に難有くない。

何だか謀られたやうに思はれて仕方がないからである。すると間もなく樂の音に連れて無數の天人が靜々と蓮歩を移して僕に近接りたまふ。何れも相好圓滿な菩薩であるらしい。猛烈なる自然の盲目的威力に對しては一言を發し得なかつた僕も、諸天諸菩薩には話が爲易く、何故こんな微溫い極樂見た如うな所へ僕を連れて來たかを呟り初めた時、天人と見たは僻目、眼を轉ずれば其の一々が惡鬼羅刹の凶相凄じく、青鬼あり赤鬼あり黑鬼あり、金棒、差叉、火の車、思ひ〳〵の得物、有らん限りの刑具を以て僕を責め苛まうとするのであつた。見渡す限りは八寒地獄、天は黑く地は爛れて劔山聳え刀樹立つ、慘澹悽愴たる光景に覺えず戰慄しつゝ如何になりゆく我が身ぞと進退維れ谷まつてゐる時、

『先生々々、何うしられましたか？』

YMに起されて我に歸れば、戸外には風雨の響が凄まじい。驚いて權現堂を這ひ出て見ると、雨は無くして、一面の曉霧滿山を罩めて咫尺を辨ずることすら出來ない。

天颷一過、遠く砂石を飛ばして山麓の長林に轟き渡るとき、見よ、東天に眞紅の幕が垂れ初めた。天籟のラッパ二たび鳴つて、それが黃金の扉を開け、三たび鳴つて瑠璃の戸帳を鎖す美しき御來光、霧雨のパプテスマを享けた八百八谷を五色七色に彩る莊嚴さ。海拔三千尺の高處から見下したとき、苦しかつた夢の跡は名殘なく消えて、僕は忽ち創造神の自覺に甦つたのである。

九六　着闇嶮山より眞つ逆さま

畫の無神論者も、夜になると有神論者になると云ふのは毛唐の寢語であるが、僕のはそれを逆に、夜の夢想にさんざ神佛に脅迫された代り、畫になつて一躍創造神に化つた次第である。反動か、自覺か、自分では無論わからぬが、兎に角此の時の氣分、實に物外世表に超然たるものであつた。見渡せば茅渟の浦、大阪灣も、昨日の光景とは異つて、幽玄美妙、宛ら佛眼を拜るかの如う。如來白毫の光と覺しき朝暾の光は普

く十方を照して、遠く紀淡の山々より近くは攝河泉播の峯巒、それ〴〵に衆會の菩薩、摩訶薩、比丘、羅漢、長跪して佛足を禮してゐるかに思はれる。さすが山南は陽氣だが耆闍崛山も北方面は何となく陰に塞ぢて重苦しい。

彼方此方の大池小沼は悉く凍つて鉛色に沈み、融けて流れた山落水の、再び凝結したものは銀色に輝いてゐる。櫟、楢、栗など雜木林の中に封じられてゐる恒河沙數の乾葉が微風に動いて閃くのが、さながらに琥珀の玉片を散らしたやうに見え、黑松赤松、柏、檜などの常磐樹のところ〴〵に點綴せる碧玉の象眼、更に趣を添へてゐる。白銀の柱と立ち、水晶の簾と垂れた瀑布二つ三つ、霜白き船坂河原は地上の銀河か、而も今しその銀河を渡る牽牛織女は杳として豆よりも小さい。

『絶景だね、山陽と山陰と、まるで風致の異ふ所に、雄大なる此の山の妙趣はあるのだ。』

『高山の晨朝の眺望ほどサブライムなものは、地球上にまたとありませんなあ。』

『もし下界に降りずに、此の儘三人で天へ昇つて仕舞ひたいやうですな。』

『モーゼとエリアが天から降つて共に天國の秘密を語つたと傳ふ高山の上で祈つて居た當時のキリストが偲ばれるね。目にこそ見えね、崇高なる此の山上、清淨なる僕等の心事、直ちに神佛と面々相接する變貌山のクライマックスだよ。』

僕が意氣昂然として斯う言つた時、恰も山巓を少し北に降つた崖の邊際に足を停めた。

『爾う云へば、先生のお顏が何となく光顏巍々として來たやうですなあ。』

『此處に三つの廬を造つては何うです？』

M君の言の終らぬうち、僕の心は一種の怪しき凶變の豫感に打たれた。然し既う遲かつた。アッ！と言ふ間もなく脚下の懸崖、忽ち俄破と崩壞れて、三人の誇大妄想狂は直下に幾千仞と果しのない深谷に墜落した。

これは夢でなく現實だから堪らない。否、山上の夢から谷底の現實に目覺めたのだ

から遣り切れない。殘念ながらまだ重力の法則に支配されつゝある人間の生身を有ちながら、創造神の自覺を誇つた瀆神の罪は覿面、天にまで擧げられたカペナウムが地獄に落された爲體。餘り見つとも好い格好でなかつた事は請合だが然し何處まで墜落しても、依然として萬物の靈表たる氣位だけは取落さず、殊に失脚して墜ち行くときの氣分は、飄々乎として羽化して登仙するが如く、別に恐怖と云つたやうな念は少しも生らなかつた。然り而して或る地點に着陸すると、微細かい砂利が足を掬うてズル〳〵〳〵と滑走。漸つと踏み止まつて、MYを呼ぶと、上の方で應と應へた間もあらせず、又ズル〳〵〳〵とMY共揃つて僕の傍に摺り落ちて來た。幸にして三人とも怪我はなかつたが、四邊は榛莽生ひ茂つて血路を開くべき方もない、見上ぐれば壁立幾十仞、天に向つて咆哮せる猛獸の如うな危巖層々、今にも頭上に轉落せんとして威嚇する巉巖の物凄さ。

折も折、啞々と鳴いて過ぎ行く山鴉が、さも僕等一行を嘲うてゐるやうなのも忌

〳〵しい。

九七　墓が見える！墓が……

『先刻、あの山頂の白蛇祠で彼鳥が念掛けてゐた御供物を横奪られた怨みを鳴いてゐるのでせうよ。』

低い處から鴉を睨仰げたY君が言ふ。

『私は御神酒をグッと一口飲つつけたが、酸ッぱくて臭いのに嘔吐を催しましたよ。』

M君は地上に唾しつゝ澁面作りながら呟く。僕は何だか狐にでも魅されてゐるのぢやないかと變な氣になつて、いろんな妄念に襲はれた。其の妄念が、だん〳〵整理されて次第に消えて無くなつた時、白日の如き確信として後に殘つたのは、迷信の如うだが、此の六甲山と名ふ山が、やはり一箇の靈山であると云ふ一念である。昨日山頂

に於ける豫感的危場と云ひ、稲荷神社の託宣と云ひ、凡骨俗腸の僕等が、漫に此の靈山を踏破して、神秘の扉を啓かうとした驕慢が、斯うした意外の墜落によりて戒められると云ふ事は、寧ろ宿命的に定まつてゐたのである。僕は崇高なる山上の靈覺に引反へて、つく〳〵人間の弱小を感じたのであつた。平素鳥なき里の蝙蝠ばかり對者にしてお山の大將を定めてゐるので、知らず〳〵増上慢に陥つた僕の妄心は、身體が安全であつたゞけ、それだけ木ッ葉微塵に打砕かれるのであつた。

然し又、思ひ返して見ると、唐櫃六甲の谷々を探り、有馬六甲の山々を索めて遂に見付からなかつた中齋墓が、或は此の邊に在るといふ天啓であるかも知れぬ。怎うかして發見したいと志した一念に僞りは無く、これまで經來つた多少の困難によつて試練された一同の誠意は定めて山靈も嘉納ましますであらうといふ自信から、探墓の熱心は、小さき自我の誇りの砕かれたと共に、更に猛烈に燃えて來たのである。此の事をYMに語ると、二君も共に勇み立ち、やをら身を起して遮二無二榛莽の中に突入

し、荊棘の間を邁進した。ドダイに道といふものは、幾ら行つても有りさうにない。樹木の盡くるところには奇巖散落、怪石磊磈、往々氷雪に閉ぢられてゐる。三人は前後互に呼應し、進めば待ち、後るれば援け、幾度か躓きながら迷ひ行くのであつた後からの思ひ出になると、其處に一種の面白味も添うて來るが、實際その時はあまり有難い心持ではなかつたのである。

足場を圖つて、何と云ふ事なしにZ字形の道を作つて下つて行くと、漸つと船坂河原の緒端に達した。河上の濫觴は、有耶無耶の溪水滴々、下るに從つて水嵩増し、季節柄、水の多きに氷多しと推測される。山靈一たび出水の動員令を下すが最後、滾々たる濁流が巨巖大石を毬の如くに押流す物凄き其の光景も想像される。併し今は此の河原の平時である。だゞ古戰場のやうな一面の荒涼、過去の龍躍虎鬪の名殘たる岩石亂列の間を縫うて行くのであつた。ものゝ四五町も來たかと思ふと、可なり大きな瀑布の上頭、全面垂氷に覆はれた斷崖の頂點に出た。この瀑布の水は何處から來て居

るのか、目擊したところでは一向分らぬ。其處で僕は、今迄辿つて來た磊磈たる岩河の底を走る暗流が無ければならぬと考へた。退くにも退かれず、躊躇逡巡、恐る恐る瀑布を瞰下すと、兩側の斷崖は氷の牙を列べ、瀧壺のあたり恐ろしく尖つた巖角は阿修羅の逆鉾を連ねて落ち來る妄者を微塵に劈かんと待構へてゐる。夢ならぬ斯の凄じき光景に臨んで、僕は股慄を禁じ得なかつた。互に見合はすMYの顏も眞ッ蒼である。YMも呆れて何にも言はぬ。僕が利けない口を利かうとした刹那、魂消るではないか、グワラ〳〵グワターンと大きな巖が天外から墜ちて來た。

『コリヤ大變！』

周章てゝ逃げやうとしたが、左岸は所謂百間摺りの大砂崩れ、右岸は今ちやうど巨石を降らした巉巖累々たる大衝立、倒れんばかりに突き出した其の傾斜危しとも危し石は幸に一行を距る十間ばかりの巖に激して運動を停めた。フト其の邊りを見ると巖間の雪に大きな足跡が印せられてゐる。恁麼時に見出した足跡であつたので一層慄

然とするではないか。Y君の鑑定に俟つまでも無く猪たることは明かである。他に山狗の足跡らしいのは數へ切れぬほどある。飢虎に五體を與へられて、兎若しくは羊等の危急を救はれたかに想はれる天山南路の眞如親王の當時の光景が偲ばれる。

何時の程にか空は一面の雲で、今にも泣き出しさうになつて來た。進退茲に谷まつて心細きこと云はんばかりなき其の時、

『アッ！墓が見える……墓が……』

突如叫んだY君が一方の巖頭を指すのであつた。

九八　役の行者と大鹽中齋

Y君の指す方へ視線を注ぐと、如何にも墓がある。高さ十四五間もありさうな髑髏形の巨巖の上に、小さな墓石が雜木の裡からチラと頭を出してゐる。何だか中齋の墓の如うな氣がしてならぬ。

兎に角三人は、この墓の一瞥に依つて九死の中から一生を得たのである。平常ならば迚も攀登ることの能きない壁立の巨巖を、氣が衝ちきつてゐるのと、墓に接近きたい一念とが、不思議に三人を清泉目掛けて驅け付くる渴者の如く無我無宙に攀ぢ登らせた。然し、又妙なもので、これが若し中齋の墓であつたら、餘り僥倖に過ぎるやうにも考へられた。勿論墓探しに就いては、一行は此の日頃一方ならぬ冒險も敢てした、隨分さま〳〵の困難も凌いで來た。それにも拘らず、今直ぐ目的の墓に出遇すといふのは何だか勿體ないやうな氣もする。もつと〳〵苦しんだ揚句でなければ得られないものを、無代價で貰ふやうな呆氣なさが、何となく感じられたのであつた。而し斯うした思ひ過しや遠慮は、いよ〳〵其の墓に近付いて見ると、半肉彫の役行者の石像であつたので

『あゝ此像が中齋墓であつて呉れたら……』

忽ち嗟嘆の聲と化つて了つて自分で自分が分らなくなつた。Y君M君の失望は云ふ

迄も無い。だが待てよ。役行者と中齋先生、此の二人者の間に、何だか共通的生命の一貫してゐるものがあるやうだぞ。前者が金剛藏王の化身であつて、絶大の法力能く一切の群邪を攘蕩した行者であるが、其の手にせる獨股杵は、宛ら後者が姦曲の心胸を貫いた槍と化り、前者の錫杖は後者が救民の旗と化り、彼れが勇猛精進の心現はす角帽子は此れの天意を戴く兜ではないか、孔雀明王呪と親民の古義力の行者と靈の信者、甲が怪神一言主を擊退めせば、乙は妖巫貢を退治した。韓國廣足と平山助次郎、孰れにも師を賣る弟子もあつた。前鬼後鬼は格之助と濟之助にあたるであらう兎に角、人の訪ひ來ぬ斯うした寒巖の上に寂しく佇てる此の墓石は、天に訴へ地に哭いた中齋が絶對孤獨の心事を語つてゐるのではないか。而して前者が魔法使ひの妖僧と呪はれて朝廷の御尋ね者となつたのに對して、後者は米屋毀しの亂魁と罵られて天下の凶狀持となり、共に世の容るゝ所とならなかつたのみならず。兩ながらその終る所が定かに知れないのである。行者が到る處、深山を開いた事は云ふまでもないが

そゝろに中齋と山岳との關係が聯想されて、彼は箕面に、此は六甲に、共に屍を埋めたのではなからうかと思はれる。現に今、六甲山中期せずして行者の墓に遇うて、中齋を偲ぶことの愈〻切なるものゝある如く、何日か又箕面山中に中齋の碑を見て行者を弔ふやうな事があるのではあるまいか。

斯う考へて來る時、僕の胸中に、行者が中齋か、中齋が行者か、時を異にして現れた二偉人が、全く一人格と化し去つて、覺えず僕をして「南無神變大菩薩」と念じつゝ其の墓前に跪拜せしめたのであつた。

『先生！こんな所に道が通じてゐますよ。甲山へ脱けられるかも知れませんぜ。』

Y君は墓石の背後の雜木林の奥に、漸つと身を容るゝ許りの谿間があるのを發見したのである。其處を潛るとだん〳〵開闊して甲山か、何處か安全な場所へ出られさうなので、これ幸ひと三人はビショ〳〵其の溪流を踏んで行つた。

間もなく身丈より高い熊笹が一面に生ひ繁つたところへ出たかと思ふと、其處は老

松古杉が隙間なく空を覆うた晝猶闇い深林であつた。

『何だか氣味の惡い箇所ですねえ。』

『然し役行者の墓があつたからこそ、こんな箇所へでも來られたのだ、若し彼の墓が無かつたら、僕等は彼處で何うなつてゐるか知れたものぢやないよ。』

『何にもせよ我々が、これほど眞面目なのですから、行者も中齋先生も必定行先を適當に導いて下さるでせうね。』

互に斯う語りながら、一番先頭に進んでゐた僕は、不圖左手を見た途端、

『おゝ墓が……』

覺えず叫んで躍り上つた。遙か向ふの方に非常に大きな墓が佇つてゐるからである僕は飛び立つ思ひにその方へ突進した。

九九　祭られざる鬼

復活した基督の姿を望んで海に駈け込んだといふペテロのやうに、僕は夢宙になつ

て墓の方へと驀進した。勿論其の間を遮る稠密なる雑木を飛び越え潜り脱け倒けつ轉げつして此處と思はれる地點に達つて見ると、これはしたり！墓は深い〳〵谿を夾んだ對方の崖に佇つてゐる。一同はガッカリしたが疲れた足に鞭ちつゝ大廻りをして對方の崖へ行つて見ると、何うなつたものか先刻見た、慥に見た墓は無い。何方を振向いて見ても墓らしいものゝ影すら無いのである。

それとも此れは僕の幻覺であつたのであらうか、後れ馳せにやつて來たMYも確かに大きな墓の聳え立つてゐるのを見たと云ふ。三人が三人共、然うした幻覺を見やう筈はないから、必度墓があるに相違ないが、何ういふものか消えて仕舞つたので致し方がない。それに船坂六甲と甲山とに挾まれた深林地帶だといふことだが、甲山が何方やら、船坂六甲も何時の間にか　え去やつて方角が薩張り分らず、四邊は鬼氣妖氣に充ちて居る。何方へ進んだら安全地帶に出ることが能きるのやら三人の中、磁石を持つてゐたのは僕ばかりであるが、それすら途中で喪つたので、全く途方に暮れて

了つた。

『ナーニ石や木の苔の生えた工合を見れば方角は分ります。』

M君は慰め顔で四邊の樹木を凝視めてゐたが、

『先刻の墓は此方ですよ。』

何か發見したかのやうな確かな語調で、斯う言つて案内して呉れるので、僕Yは默々として跟いて行くと、懸崖の端に行き詰つた。

『あ、墓は彼處です。』

更にM君が叫んだので左手を見ると、如何にも先刻見た大きな墓が聳えてゐる。可笑しい具合だとは思ひながらも、一同又ぞろ方向を轉じ、又々雑木を潜り脱けて漸つと其の地點に行つて見ると、不思議にも消えて仕舞ふ。

『滿山の樹木巖石　悉く中齋の墓ではあるまいか。』

堪らず僕は絶叫した。

『私等も此の儘墓に化つて了ひさうですなあ。』
『妖怪かに魅まれてゐるのではありますまいか。墓、墓、墓と一生懸命に探して居る私等の心の隙に乗じて、必度狐狸の類が悪弄つてるのですよ。』
『左に右怪しいね。二度までも墓を見て、行つて見れば消えて了ふのだから、キツト幻覺に違ひないね。お互に如何かしてゐるよ。それにしても、彼の虎公や巳のやんが墓を見たと云ふのも、やつぱりこんな事であつたかも知れないね。』
『爾うですね、彼等の見た墓も脊の高い大きな墓だつたと云ひましたな、然しあれは唐櫃六甲でしやう。』
『唐櫃にしろ、船坂にしろ、甲山にしろ、兎に角、此處等邊には必度祭られざるの鬼が有るのだよ、或はその鬼の爲す作爲かも知れないよ。其鬼の何者であるかゞ分つたら、僕等は早速今、幻覺に見た通りの墓を建てゝ供養して遣りたいね。』
『其の祭られざる鬼こそ、中齋先生では無いでしやうか。』

『或は然うかも知れない。何れにしても、その靈を弔ふべく、これからお經でも誦まうぢやないか。』
『何經を誦みますかな。』
僕は合羽包みを披げて、小本の淨土三部經を取出し、石に踞して光明嘆德章を誦した。誦し了つて三人聲を合せて念佛唱名すること約三十分、これで何となく氣も落ちつき、墜落以來一種の鬼氣が身に迫つてゐたことに氣が注いた事ほど左樣にサツパリした。

一〇〇　生ける神殿

斯くして一同の心は聊か沈着いて來た如うだが、一行の前途は猶頗る暗澹たるものである。
『ヤ！先生、大分酷く降つて來ましたよ。』

Y君が叫ぶのも無理は無い、積りさうにも思はれ無かつたチラ〳〵雪が吹雪と化つて火焔の如く八方に渦巻きつゝある。日は暮れんとする。風はます〳〵烈しくなりさうである。

『斯樣場所に魔誤々々してゐたら、どんな目に會ふかも知れませんぜ』

『もう墓探しは一先づ打ち止めとしませうぢやありませんか』

YMが斯ういつて、そこへ平太張つたので、僕は『しまつた！』と一時に不安に襲はれた。が、まてしばし、中齋先生が天保三年の冬、伏見から江州に入り、琵琶湖に泛んで比良の麓に、中江藤樹の遺跡を訪はれた歸り路に、大溝から坂本まで再び湖上の人となられたが、折しも起る天颪に船は宛ら木の葉の如く、櫓も棹も波に奪られて水夫揖取も爲術無く、船中誰一人生きた心地のしたものゝ無い中に、神色自若として只管誠敬を念じて泰然たる中齋先生の態度に、神の如き威嚴があつたとか。是卽ち『大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜に衆禍の波轉ず云々』の親

鸞の信仰ではないか。中齋黨であり親鸞信徒を以て自ら任じてゐるだけに、却つて爾うした信仰から離れてゐるのである。と我と吾身の淺猿しさが憐まれたが、實際憫むべき不信の輩だから仕方が無い。否、不信どころでなく、知らず識らず虛僞に凝つて居たことに氣がついて來て、恐ろしさに忽ち起つて南無とばかりに、懺悔か、祈禱か歸依か、哀願か、我を忘れて合掌拜伏してゐると、不思議な加護が加はつたかに思はれて、暗澹たる心の底に一脈の光明が輝いたかに信へて來た。易の所謂上に剝して下に復る卽ち九陰窮つて一陽まさに生せんとするものか。

『先生！黝黑い複雜な唐櫃六甲には籠の多聞寺から、心經の彫り付けられた彼の頂上の蜘蛛ケ嶽までには觀音の三十三身が、三十三ヶ所の小さな石室に祀られてゐますし、嶽鼻や路傍の其處此處に六地藏だの、不動だのが立つてもゐまして、山の姿から樹木の趣までが何だか抹香臭く、見るから佛敎的ですが、稲荷や猿田彦に初まつて白山權現祠に終る淨潔な此の船坂六甲は慥に神道的だと思ひます。役の行者

や、中齋先生も其の時代及び性行から推して、寧ろ清淨な崇高な神道的人物の如うにも考へられますから、茲で大祓を上げて頂きたいものですね。』

と、曰つたM君の目にはかなはぬ時の神頼みといつた眞劍さが閃いてゐる。

『ナーニ、白山權現は中齋の所謂大虛、取も直さず易の大極、般若の空々、法華の神力、神道の祝詞であり基敎の所謂福音なるものゝ象徴だよ。しかし何れにしても一同の心が六根清淨と洗ひ淨められ、如何なる魔障も災害を加へることも能きまいと思ふ程の自信が生じないと、如何することも能きないから……』

天津祝詞の太祝詞伊弉諾尊の宣命にして、高天原の祭主たる天兒屋根命の諄辭であつて、神武天皇の御宇天種子命神代文字にて書かれしを兒屋十八世の孫常盤大連が漢字に書き代へたと傳ふ中臣祓を誦げることにした。

高天原爾 神留坐 皇親神漏岐神漏美乃 命以氏 八百萬神等於 神集集賜比
神議議賜天 吾皇御孫尊乎 豐芦原乃 水穗乃 國於

と誦つて、息をつぐと、

安國止 平久 所知食止 事依奉岐

と、何處からか聲がする。

『はてな？』

如斯依止 奉志 國乃中爾 荒振神等乎

と續けると、

神問志爾 問志賜比

と續いて聞える。

しかし四邊に人が居さうにも思はれない。

怎うも合點が屆かぬ。恐らく僕の心の迷ひであらう。こんな心境では如何もならぬと、僕は結跏趺坐して、心氣の湛然たるを待つた。斯くして僕は獨特の契印法に依つて易を斷てた。然し『澤天夫の初爻變』を得たので落膽した。『初大壯于前趾。往不勝

爲ゝ咎』との交辭が、『ギクッ！』と僕の心胸を衝いたからである。

『まだ〳〵僕等の心は昂奮してゐるよ、このまゝ急いで活路を求めやうとしても、却つて迷ひ込むばかりである。それに恁麽に暗くなつては、怎うにも仕方がない、寧そ今夜は此處で野宿をする覺悟を決めて、ユックリやつた方が好いよ、急躁ると飛んでもない破目に陷るから……』

僕は易斷の結果をMYに告げて、兎に角少時、休憩と云ふことにしたので、落葉搔き寄せ、枯木をへし折り、火を燃して暖を取つた。空腹くなつたので、四邊の雪を握つて食つて見ると、飢えたる舌には非常に美味かつたのである。

「雪團飯に飢をしのぎていたつきを
　忘れ果てにし君にもあるかな」

氣の毒と思つたか、Y君が斯う歌つて僕を慰めて呉れた。これは首途の時、僕は風邪に罹つて三十八度の熱があつた、それが勇み立つた連日の山旅に、何時となく忘れ

たやうに癒つて仕舞つたのである。

次にM君の口吟、

「岩木分け、かくれし君が跡とへば
　松風すごく吹きわたるのみ」

名吟々々と感賞した後、僕も何か出さねばならぬやうな義理合ひになつたが、生憎何も出て來なかつた。ところが其の松風の松から、自分の敷いてゐる松枝を聯想して色變へぬ眞人の心を偲び、又其の靈明遍在を讃嘆するの餘り、耻を忘れて終に斯んな駄歌を唸つた。

「折り敷ける常磐の松の一葉にも
　君がまことを見てぞかしこむ」

雪團飯で氣ばかりの腹も出來た。鬼神の心をすら和めると云ふ和歌を各目に口吟んだ一同は、やをら起ち上つて再び道無き道を辿り初めた。今度は心の中に何となく大

丈夫だといふ信念が強まる。

一〇一　自己の葬式

『もう墓探しはこれで打止めと仕様ぢやありませんか』

負惜みの凝塊かの如うに思つて居たY君が、再度の悲鳴には驚かされる。山里に生れて山里に育つた流石のM君も、いよ〳〵ゲッソリしたらしく、

『現實に中齋先生の墓を發見し得ないのは甚だ殘念ですが、只今幻覺に映じた墓が怎うも私には中齋先生の靈ではないかと思はれて仕様がありません』

と、言ひつゝ退却の身構へをしながら、四邊を見廻して、只管歸路を搜し求むるらしいY君を顧みた。

『私も爾ういふ氣がしましたよ。而して我々は、今それを船坂と甲山の間に見、虎公等は、同じ墓を唐櫃六甲の森林中に見たとすれば、其處に靈の遍在といふことが

信ぜられますね。して見ると特に記念すべき墓標は有つても無くても可いでせう。六甲と甲山全體を以て中齋塚と見たら可い。否、然見るべきだ、と私は始めて悟りました。隨つて私は只今限り墓探しの志を拋棄します。嘗て私は高野山に登つた時、大師の入定地を尋ねましたが、彼方此方と都合七ヶ所もあつたので、その悉くが嘘であると覺つたと共に、高野山全體が入定地であると思つたことでした。完全に齋裡に病死を遂げ兜率上生を遺弟に告げたと傳ふ弘法を、正しく入定せしものと信徒の胸に映ずることは、其の儘にして墓より蘇りて昇天したと傳はれて居るキリストが、完全に棺と共に腐朽した反證であつて、又三好屋燒死說を絕對に否定し得ない我等をして、墓を此の山に漁らしめし靈の手引きではないでせうか。兎に角我々は十二分に滿足して、感謝して、歸路に就いて可いと思ひます』

斯う言つたY君ばかりでなく、M君の心にも、實際目的を成遂げたといふ滿足のあることは、明敏なる彼等の眼色が其事を語つてゐる。併し、僕は今茲で氣を弛緩させ

ては箍の弛んだ水桶から水の漏れる如うに、元氣忽ち沮喪して、疲勞の爲に動かれ無くなりはしなからうかと案じられるので、

『イヤ右にも左にも中齋の墓は動いて居る。否、お互の内に中齋は復活して居るさ聖書に「マリヤよ、我に觸るゝ勿れ」と復活の耶蘇が言つたとあるのも、人間の復活は、肉眼の世界に蹋躇して居ては分らないとの意味なのだからね。然し、宇宙に遍滿し玉ふ全能の神なればこそ、神殿の扉の内に、御幣ともならさせ給ふのだ。蠱魚臭い黄卷赤軸中に捲込まれたり、古呆けた龕堂内に蜘蛛の巣に閉鎖されもしたまうてこそ、遍一切處であり、不可思議光佛ではないか。隨所に古人と面々相對し得るの人は、絶えて人目に觸かない埋れた墓石をも發見し得るの人であらねばならぬ。元來此行たるや、神の敎會であり佛の學校たる山上、否、眞の洗心洞塾とも稱ふべき山上の靈氣に浸潤沒溺で心垢を洗滌したいといふ念願から出發してもゐるのだよ。禽獸に還り神に歸る、所謂超人卽末人、否、超世の悲願こそ、末世の救ひで

あるとの信仰からではないか。親鸞の法爾、日蓮の妙法、中齋の所謂太虛に歸して俗塵は穢されたる本源の淸淨心を回復したい爲でもあつたのだ。謂はゞ耶蘇が荒野の彷徨。菩提樹下に於ける釋迦の端座ではないか。あてにならぬ傳說をあてにして雲を攫むやうな事を眞面目に行るのは、彼の虹の脚には金の茶釜が埋まつてゐると傳ふ話を聞いて正直に鋤を擔いで掘りに出かけたといふお伽噺中のフールにも似てゐると、自分ながら可笑しく思はぬこともない。自分で可笑しく思ふ位であるから、他人の目からは定めし氣狂ひ沙汰と見えるに相違あるまいが、僕は徹頭徹尾眞劍なのだ。イヤ眞劍と覺らぬ眞劍、謂はずと知れた生命がけの行なのだ。眞人は狂に近しと謂ふが　縱令凡俗の目に狂人と映じても、神の目に眞人であれば可い。風雪、寒氣は愚かなこと、疲勞、昏倒、飢餓、凍傷その外如何なる惡魔の誘惑にも打勝つて、怎うでも中齋墓を確とつきとめなくちやならないよ』

斯う言つて更に言葉を繼がうとすると、M君は遮る如うに、

『肝腎の墓も發見し得ずして十二分に酬ゐられたと云ふと何だか、一向ロヂックが合はぬではないかと、又お叱りを蒙るかも知れませぬが、縱令墓を發見したところで、其の前に合掌禮拜して歸る位が關の山で、何時しか其處に神社が建てられ、其社によりて衣食にありつく神官がある位の餘德はあるにしましても、それは餘りに詰らなさ過ぎるぢやありませんか、それに古傑の笠の祀られた笠神社を、黴毒神社などゝ訛つて、黴毒患者を引張込むといつた如うな神主の多い世の中ですからね』

『それやM君！神社佛閣が廣告館や名利の密獵所に化つてゐる今日こそ、古來の高僧、聖者、英雄、豪傑、若しくは忠臣義士の墓が賣藥の廣告塔や藝人の招牌石に化つても居るが、そも〳〵墓といふものは、先人を追慕する後人の誠意眞情に依つて建てられるものであつて、先人の靈のシムボルであるよりは、寧ろ後人の心の表現なのである。素より昔は生前から自己の墓を造るに忙しかつた埃及の王の如きもあつたが大觀すれば地球その物が人類の墓なのだ。然し埋沒せる故人の墓を見出して

知己に感激するやうな眞純な心の所有主であつてこそ、逝きし心靈の遍在を信じて隨所に眞實渴仰の心を以て之に接することが能きるのだと思ふね。況して中齋先生の如き偉人格は實に天地一貫、永遠不死の神靈である。一念信じて之を仰ぐ時、其の威烈炳焉たる忠魂は忽ち已心に電來するのであるが、お互が斯うして死んだ墓を探るのに生命懸けにならなかつたら、此身此心を直に先生の靈の宿り給ふ活ける墓否、活ける神殿として献げ奉らんとする信仰は熱發したか否かは疑問だよ』

『新約全書約翰傳にも「馬利亞立於墓前而哭、哭時俯視墓內、見天使衣白衣坐耶蘇尸所葬之處、天使謂之曰、婦歟、爾何哭、婦謂之曰、因人取吾主去、我不知其於何處置之、言此畢返顧見耶蘇立而不知其爲耶蘇云々」とある。耶蘇は既に復活して墓中には居ないのであつた。而も熱心に墓を探つて主を求めた氣狂ひじみた馬利亞は誰よりも早く、復活した耶蘇に會ふことが能きたのである。我々が

此度の探墓行も爾うした意義と教訓の存することを喜ばねばならぬ』

『然し、我々は御蔭で既う爾うした教訓と意義に滿されたのに滿足しましたから、サッサと歸途に就きたいと思ひます』

盲滅法にMYは歸りを急ぎ出した。やがて來らんとする災厄の豫感に襲はれてゐるのではあるまいか。と案じられるので、沈着き拂つて僕は曰つた。

『所で僕は一人取殘されたいね。實際僕は自己を此山へ葬りに來たのだから……

……』

『えッ？』

一〇二　六甲山下のシェリイとバイロン

MYは覺えず僕の顏を凝視めた。

『勿論來しなには爾うした意識は無かつたが、何時の程にか死神に取憑かれて了つ

たらしいのだ。然しまだ人生の花形役者であり現代社會の戰士たる君等は片時も早く歸る方が可からうが、既う世に希望を有たない僕は現世と何の關係もありやしない。だがね本當の事をいへば、人間の仕事は死仕度より外には無い筈だ。而も人は眞の孤獨に陷つて、初めて世間と結合くのではないか。勿論苦を慰めるものは苦であり、業を他にして業を拔くことは能きない如く、孤獨の伴は孤獨であり、自己は自己によらねば救はれないがね。寧樂を去つた教信、勝尾山に遁れた善仲善算那智に入つた文覺、笠置に潛んだ貞慶、叡山に登つた法、親、日、道はいはずもがな。遠くはヒラの山中に入つたマホメット、近くはヤスヤナポリヤナの草廬を脱出したトルストイ、もと現に今お互が其の後を追へる中齋先生が六甲に潛ばれたのも要するに、死の準備ではなかつたか。無常迅速、生死事大と覺り、往生之業、念佛爲本と信つたからではなかつたか。最後の審判の喇叭を聞きつゝあつたからではなかつたか。死か、狂かの二つに一つを選ばねばならなかつたからではなつたか。否定

の外に肯定は無い。己れを殺すの外に己れを愛する道は無い。「今我肉體に在りて生くるは我が爲に己れを捐てし者、卽ち神の子の信仰の中に生くるなり」とポーロも叫つて居る。「我はたゞ吾を愛す」とは、一切を捨てゝ深林に入つた古聖の言であるが、眞に己れを愛することは、その儘にして一切衆生の濟度ではないか。人は己れを全然の他人として見かぎり捨てる程の、大なる利己心によつて永遠に生くるのではないか。己れは他の中に存し、他は自己の內部に住まへるのではないか』

MYは呟とも須呟とも吐はない。併し僕も斯うはいつては居るが、若しも今、誰かが殺しにかゝつたなら、怎麼醜態を見はすかわかりやしないのだ。尤も僕が斯麼言を吐ふのは、僕自身が言つてるのか、何物かに言はされてゐるのか、我身ながら明瞭しないのである。といつて單に一同の心が沈着かないと、斯の迷宮から遁れ得られないとの心配ばかりからでも無い。此間中からの冒險に事無かりしに油斷して、途方途轍も無い謂はゞ魔の國へ踏込んで居るのである。僕は强か恐怖を感じても居るけれども、

何故か又此の恐ろしき惡魔の住家に留まれるものならば、留まりたいと思うのだ。といつて僕は「初筮に告ぐ再三すれば瀆る」とは知りながら、不安に堪へられぬまゝ密と更び易を斷てて「履卦九五の變」を得たのに驚いても居るし。「履むことを夬む、貞しけれども厲し」との爻辭に膽を冷しても居るのである。「汝の運命は盡きたのである。最早努むる勿れ、神から見放されて居るのである。チチパタしても所詮助かる見込はない」との惡魔の誘惑であるとは思ひつゝも、斯の誘惑から脫れることの難きは、高山の頂から綸を垂れて海底の針を通すよりも難きが如くに思はれるのは何故であらう？、大海を干上げて妙寶を得んとするにも勝つた僕の探慕熱も、斯うした誘惑には敵はない。しかし僕は最初から怎うならうと運命の命ずるまゝに隨順する覺悟を決めて居るのである。たゞ怎うにかしてMYを無事に歸らせねばならぬ。孰れもこれからの人間だ。人生の蕾である。此の世の初穗ではないか。所が驚くまいことか、起ちつ居つして厄鬼盲鬼と氣を揉んでゐたM君、ドッカと大地に五體を据ゑて、意外なことを

語ひ出した。

『ぢや私も度胸を決めませう。歸路を索すことを中止しまして洞窟でも發見しませう。無論私は今此處で死んだところで殘念とは思ひませぬ。打明けて申しますと、私はこれまで三度も自殺を企ててやり損つたのです。滝車往生を行りかけて驛夫に發見られたり伊丹の海に投じて漁夫に助けられもしました。それと云ふのも虚榮心が强い爲に、死に當面しながら、餘り醜い姿を殘したく無いと云ふ如うな考へが又しても首を擡るからであります。私は平素彼のシエレーの長詩センシーを愛誦して居りますが、娘を憎んで、夜な〳〵之を姦する伯爵なる父を、二三僕の助をかりて謀殺した彼の娘は、最も能く私の心境を穿つて居ると思ひます。實父を殺しながら天に恥ぢず地に恥ぢざるのみか、寧ろ神人共に憤るこの深重なる大罪人を神に代りて誅戮したと信じてゐましたが、いよ〳〵法廷上に死刑の宣告を受くると同時に爾うした信仰の石崖は俄破と崩壞れて、絶望悲憤のドン底に墜落し、この若さ、こ

の美しさで殺される自分は實に痛ましくも亦悲しむべきかな。と己れを惜むの餘り憫むの餘り、世を呪ひ人を恨み、呆然自失久しふして遂に「我寧ろ地獄に墮かん！地獄に行きて……然り！地獄に落きて、我が人をもて殺したる彼、我父に遇はん」と絶叫び出した。激越沈痛の調と電波の如き美的情火を以て神を天上より引摺り下し、地獄より呼出した惡魔をして一蹴之を殺さしむるの彼れシエレーは百年前に私の心を歌つて呉れました。恩怨倶に深きところ、血燃え涙凍り、鬼人泣き、天人來り咽ぶ。其の悲、其の愴、絶言亡慮の一境を描き出せし彼のセンシーは私の魂のおのゝきです。百年前の七月四日、彼れシエレーが最後の日は私の今日かも知れませぬ。私は今年彼れの沒年たる三十歳になりますが、何一つ仕出かしたこともなく、多くの他に厄介と迷惑をかけたばかりです。しかし名も無く功も無くして空しく此處に骨を曝すことが、私は寧ろ幸福だと思へて來ましたよ。私は神の存在に對する疑惑に導かれて神の理解に力めた爲に、全然神を喪つて了つた私は、父母の愛

にも疑惑を抱いて一度異性に走つてより以來、異性は私に取りての神でありました併し爾うした嫉妬の神は私を地獄に墮して呉れました。私は今此處で戀も怨みも恩も義理も悉く捨てませう。元來私は勞働も能きぬに、天才無くして生きて居る事は罪惡であると信じて居るのです。それが私をして死に走らせる一原因かも知れません。然しそれが私の信仰だといへば信仰でせう。人は、ウオーヅワースに到る前に、而して更にバンヤンの順禮紀行に達る前に、バイロンの情熱か、然らずばシエレーの深刻味に觸るべきだと思ひます。然し、私は幸か、不幸か、バイロンへ行かずにシエレーに行きました。而も私は、生きんとして生きも叶はず、死なんとして死にもならず、生死の分水嶺に釘けられて久しく悶えて居ましたが、一躍分水嶺を飛越し得たことを、先生に感謝せずには居られません』

緊張充實、觸るれば燃えるかの如うなM君の斯うした言は、或は僕に對する怨言ではなからうかとM君の顔を見ると、カリバリ山上に二人の盜賊の間に十字架に懸け

られた人の如うに、悲痛の底に尊き輝きが潜んで居るかに思はれる。兎に角、M君は炭塊であつた。初めて見た時から刻々に燃えて來て、たう〳〵全部火に化つて了つた如うである。摩擦れば火を發するが、枯木の如うなY君とは聊か異つて居るらしい。併し夜明け前に孤り鳴く小鳥の如うで、やがて天地に響き亘る大音聲と化るシエレーとは格別緣も無ささうである。成程優しさうで剛情らしく、沈着いて居る如うで、其實狼狽者らしいところは、シエレーの一面を偲ばせるが、實質本體は、寧ろその到達の終點として居るらしい彼の『鑄掛屋の說敎者』バンヤンに近くはなからうか。勿論M君にはバンヤン的な剛健な意志は無からうが、漸々に燃えて來るところが幾らか似通つてゐるかに思はれる。それは恰度、豪壯らしいY君の外貌が、一見バイロンの心の象徵かに思へるのと一緒である。然しY君は自然に深く親んで居る所爲か、何となく寬厚な、純朴な、湖畔詩人の俤を偲ばせる。それもY君が舊い田舍の富家に生れたからであらう。古來民衆の爲に眞に盡した者は、王者、貴族、若しくは名門、權者

或は富豪、學者か、但しはそれ等の子孫に多い如うに、革命家の多くが詩人であるかに思へるが、未だ嘗て最下に降りて飢餓の洗禮を享けて來ないで、下級民の同朋となつた上級民も無ければ壓迫と窮困の地層を濾過せずに、地上に噴湧した詩人は一人だつてありやしない。Y君もM君と等しく田舍詩人ではあらうけれど、まだ飢渴のパプテスマを受けてゐない所爲か、安全過ぎるほど安全な人物である。それに意識界のM君は自由思想家らしくも見えるけれども、無意識界のM君は、淸敎徒であつて、神學者の商賣道具たる基督に、破壞されて了つてゐるのではないか、しかしこれも遺傳であつてM君自身の知つたことではないらしい。それは左に右、靑春の血に燃ゆる物言ふ花も、接吻すると死人の臭ひがする筈である。一指觸へても女は直ぐ死人になつて終生對者を惱ますものと覺りつゝも、死人を擔うてウン〳〵藻掻いて居れるだけ、それだけY君は幸福だが、M君は異性との爭鬪に一切を犧牲にしてゐるかに思はれる。對者の女はM君の本質に殺され損ねた爲に、却つてM君を殺さんとしてゐるが、M君

は殺されてやるほどの度量も無く、さりとて對者を殺しきるには力は足らず、孰れも半死半生の儘相組んで地獄に陷つて居るらしい。しかし才子らしくて本質は全く融通の利かなさうなM君としては、三度も自殺を企てたのも無理からぬことだと思はれる樹木に蜜汁を搾出させるものは風より外に無く、他に秘密を打明かさせるの道は自己の秘密を打明かす外には無いとか云ふことだが、M君の眞身献さに、流石のY君も出發以來袖を裂き裾をからげ、袒ぎながら、未練氣に身に纏つてゐた其の誇妄虛慢の心衣を全然脫いで、美しき赤裸々の心姿を見せた。M君の決心にY君は語る、

『イヤ異性の爲に全破壞に瀕せる君の惱みは其儘にして事業蹉躓の爲に社會的に自殺せなければならない僕の目下の悶えであらう。併し君から見ると僕は弱い。弱くて迂愚だ。平凡だ。淺薄だ。所詮今の世に生存の出來る人間では無い。君の何處までも感情的であり、精神的であるのとは反對に、何處までも理智的であり物質的でありながら、物質萬能、理智本位の今の世に虐げられるのだからな』

怎うやらY君の胸にも遁世思想が湧き上つて來たらしい。六甲山下の此のシエレーとバイロンは全く度胸を据えたらしい。慥かに生死を超越したかに思はれる。僕は暗室に幾萬燭光かの燈明の點ぜられた心地がした。我が全愛を献げたいと願つてゐた人生の苦であり、初穂であるMY今し酒屋の大桶から酌み出されたる芳醇にも同じき此のMYが、其の柔かい若い生身を抛出さうとする其の潔さを眼前に見ながら舊い革嚢にも劣つた使ひ枯しの僕たるものが、怎うしてノコ〳〵生きて還られやうか。

一〇三　白骨で築かれた死の國の城廓

『イヤ怎うせ氣狂ひ地味た僕等に跟隨て斯樣斷末魔へまで來ることが能きたのはよくせき心に惱みがあるからだよ。その內情は聞かぬ無くとも、生くるか死ぬるかの瀬戸際を歩み、涙の化石を踏み血の湖を徒渉つて居ることは解つて居たよ。如何だ兩君！喧囂雜亂の巷を見かぎつて、斯うした靜寂幽玄の神秘境に安住することにしては如何だ。濁悪なる近代文化の爲に、否、名利に鎖がれ、名聞利欲に鎖がれて、分裂の爲の分裂と鬪爭の爲の鬪爭に狂ひ、空しく老け行く器械生活の爲に表はれた靈性を、恢復への方向轉換ではないか。「天國に到るの道は窄し」尊嚴なる轉換であるだけに、困難も一通りではないが、道德を捷守するものは一時に寂寞たり、權勢に依阿するものは萬古に凄凉たりと、洪自誠も言つてゐる。社會の最高層たる高僧聖者すら黃金の波に醮つて了つてゐるではないか。何々禪師の二百四十七回忌を二百五十回忌、何々太子の千二百九十九年忌を千三百年忌、何大師の千百九十八回忌を千二百回忌、何々左衞門の百九十九回忌を二百回忌と囃したてゝお祭騷ぎの法要を營む殊勝なところにまで、さうした水害の餘毒は及んでる如うだ。社會現象の一切が何だか風邪一つ引かない達者な人間を突然棺桶へ打込んで火葬若しくは土葬を營むにも等しく感ぜられるではないか。惡人といはれてゐる人が惡事を働くのを見るよりも、善人と云ひ且ついはれ信仰家と許し又されてゐる人が、神の名により佛

の名によりて悪事をなすことが、怎れだけ人生を悪化するか知れたものぢやない。田舎を都會製造の材料と化し、貧者、弱者を、富者強者を肥す餌食と化するのと、畢竟さうしたことが原因ではあるまいか。それに一切は機に生じ縁に成る。如何に生苦しい物質生活の殼を破つて、自由の天地に翱翔したいと念つても機縁に恵まれなければ達し得られるべくもないが、お互がゆくりなくも斯く相携へて此處に來たことはお互の生命が永遠に向つて芽萠えるそも〳〵なのだ。日夜齷齪として、名聞利欲の爲に爪牙を磨ぐことの他に、何物をも見出し得ない濁悪なる巷に歸ることを見合はせて、此の儘此處に幽棲しやうではないか。禁欲、祈禱、布施其の儘が、神の子であり、成佛であるとしても、獄屋の外に禁欲の場所を求め、病室以外に祈禱所を漁り、窮民窟を餘所に見て布施の心を生ずる場所を索むるならば、斯うした幽谷より外には無い筈である。而もそれは禁欲と知らぬ禁欲、祈禱と覺えぬ祈禱、布施と氣付かぬ布施、即ち淨土と知らぬ淨土、天國と覺らない天國、即ち是れ眞の淨

土、眞の天國ではないか。これ即ちY君本來の念願だと聞いてゐる生活の藝術化であり、M君もその最後の到達點として崇めて居るパンヤンに參徹するの一歩ではないか。勿論この寒さでは蕨も食へまいが、百合根や朝鮮人蔘を掘せ繰つても生命はつなげさうぢやないか。冷灰樹木を育み、枯木火を發するだ。雪の下にも若草の根は萠えて居る筈である』

健實なYMの覺悟に感まされて、僕は意を決して斯ういつた。靜雲止水に飛鳶躍魚を覺り得ない僕に、閑時に喫緊的の心思の有らう道理が無い。怎うして又死及閃き鬼哭愀々たる斯うした忙所に悠間的の風懐を發揮し得られやうか。たゞ怪我させてはならぬ己れを捨てゝも恙なく歸村させねばならぬとばかりに、悶えに悶えてゐたYMに却つて本當に救はれて、極端なる恐怖から極端なる安心に蘇つたからである。斯う思つて來ると漢にはYMが神の子の如うな心地がする。僕は跪いて其の靴の紐だも結ぶ資格のあるものではない。といつて、罪人の首だといふ如うな善人の頭でも無か

らうし罪業深重の泥凡夫だと叫ぶほどの惡人でもあるまいが、僕にはYMが心の暗を破つて來れる最後の光明であるかに思へて來た。YMを通して人生を見、社會を見ると佛、菩薩の充滿し玉ふ淨土の光景を呈し來るに相違ない。僕は斷頭臺に上らんとする死刑囚に祈禱されて、基督が復活して、茲に在りて覺えず歡呼し拜跪したと云ふ牧師某の心事に想到して、そゝろに涙ぐましい心地がして來た。斯くてYMは何か言はんとして居ると、俄然、山を吹き飛ばしさうな暴颱が天地を破壞せんばかりに猛り狂つて來たのに戰慄ひ上つたものか、

『オヤ先生！大變ですよ』

と、覺えず叫んだYMの聲は全魂のおのゝきに聞えた。すると忽ち背後に大雷が落下したかの如うな物凄い音がした。驚くまいことか、其聲は雲衝ばかりの老杉が根こそぎ打倒れた音であつた。YMが無我無宙に驅出すのも無理からぬことである。

『危險い〳〵待て……』

旋風に捲上げられんとして辛くも殘つた僕は周章てYMを呼び止めたが、瞬くうちにYMの姿は消えちやつた。ああ「小狐汽ど濟らんとして其尾を濡す」か、僕は天を仰いで痛嘆せざるを得ない。雪は火焔の如く下から上へ渦卷き上つて居る。一切を呑み盡す夜と名ふ惡魔はそろ〳〵薄靄の舌を吐きつゝある。「其首を濡せば孚あつて是を失ふ」とは覺りつゝも、僕はヂーッとしては居れなくなつた。然し、YMの去つた方向へ息急追つ驅けて見たけれども、何方へ怎う外れたのか影も形も見當ら無い。無事に歸つて呉るれば好いが、YMに萬一の事があつては大變だ。と僕は俄にYMが氣掛、りでならなくなつた。

『オーイY君！M君！オーイ〳〵』

と、大聲擧げて呼べど叫べど、應ふるものは暴風怒號の響ばかりである。

一〇四　念佛よりも失念佛

僕は我知らず念佛した。スルト不思議にも怒潮の如うな暴飈をすかして鈴の音が何處からか微細く聞えるかの如うな心地がする。「ヤヤ忝けない！」と耳を澄ましたがチーンともゴーンとも聞はない。又例の妄想妄念ぞと、自ら叱して里に出づべき方向を考へてゐると不圖また念佛の聲がするかのやうに思はれる。「はてな？」と吹雪と暴飈を冒して近づいて行つたが、矢張り心の迷ひであつたらしい。更に足を進めやうと思ふけれども、ハタと行詰まつて二進も三進も能きない。疲勞れて海綿の如うになつた五體に水氣は泌み徹る、寒氣は骨か、骨が寒氣か分らなくなつた。はらへども〳〵雪は全身を鶴裳に仕立てゝ了ふ。泣くにも泣けず全く途方に暮れ果てたが。「いづくへと、一筋道の直ければ、踏み迷ふこともなき……」と誰やらの句が思ひ浮ぶ。いざさらば斃るところまでと、倒けつ轉びつ吹飛ばされつして、雪に蔽はれた危險山道を低地へ〳〵と一方面へ下つて行つた。言ひ知れない困難に堪へ、恐ろしとも恐ろしき險難を冒して、ものゝ十四五町も來た甲斐あつて、鬼哭愀々の感ある深林から漸つ

と脱れ出た嬉しさ。忝けなさ。

『やれ〳〵』

と、胸撫で下した刹那「あッ！」と魂消て平太駄らざるを得なかつた。低地の底の對方に險しい高地が行手を塞いで居るからだ。地の果てから果へ亘つた白骨で築かれた死の國の城廓でゞもあるかの如うに、白皚々たる雪の連峰が、夕闇に銀鼠色にぼかされて蜒々と續いて居るからである。

一〇五　南無大鹽大明神

イヤ念佛など唱へてはならぬ。僕を斯うした死地へ導いたのは念佛の聲ではないか友を失ふた時、初めて友が知れる。詩は以て詩人の感興消滅の報告ではないか。念佛を忘れ無ければ念佛心は生らない。神佛を棄て切らねば神佛に救はれない。否、忘れるべき念佛があり神佛があるやうでは、既に念佛に殺され、神佛に見捨られてゐる

のである。無神無佛にして、然り！無宗無信仰にして、初めて神佛に會へるのだ。信仰を飾ひ落し、神佛と我と何の關係無さにいたつて、初めて信仰が體驗され、神佛に攝取されるのである。眞人は名無しと、莊子も曰つて居る。神佛と名ひ、宗敎と稱ふ畢竟それは殼である、戒名である。信者、敎徒とは制度や信條の手枷足枷にフン縛られた一種の罪人ではないか。況んや敎祖をやである。僧侶、牧師は愚かなこと、口に信仰を云々し、神佛を喋々するものゝ總ては、名聞利欲の密獵者であり、罪惡傳波の蜘蛛狀菌ではないか。誰か汝を縛するや、我先づ我自らを解放してやらねばならぬ。欲望の繩目を解いてやらねばならぬ。斯くして吾人の邁進すべき一脈の白道が發見されるのでは無いか。全體僕等は人生の迷路に深入して、要らざる苦惱を重ねてゐるのである。早く其の出口を發見出さねばならぬ。併し其の出口は縺れた糸の緒同樣、見付け出さうとすればするほど、紛れ込むとばかりである。縺れたなりに緩めて見ようではないか。つら〳〵顧へば僕が半世の心血は悉く己れの爲に注いだつもりであ

つたが、それが悉く自己の仇となつて居る。斯うすれば他が服するか、怎うすれば自己が輝くか、如何にかして偉いものになつてやらう。萬人に勝れた智慧を發揮し呉れやうと、餓虎が食を漁る如くに智識を求め、努力し奮鬪し、苦勞の有りたけを仕盡したが、而もその悉くが己れを顚かせ、己れを辱しめ、己れを傷け己れを葬るの努力であつた。思へば思ふほど悲慘なる努力であつた。僕の小さき利己心は僕の半世を棒に振つた。思へば實に憫むべき人間だ。否、僕の爲には惡むべき人間、牛裂きにしても飽足らぬ人間だ。他の爲、世間の爲には尙更ではないか。といつて今更怎うすることも能きない。一度死んで蘇へるより道はあるまいと思つて來て何故か急に睡くて〳〵仕方が無くなつた。恐いものも無ければ欲も得も無い。馬に千駄の金は素よりたとへ世界を與れても要らぬ。妻子は愚か生命も要らぬ。神や佛も何も要らぬ。僕は我知らず大樹の下へゴロリとやつた。感覺も意識も何も彼も氷つて了つたものか、凄じい嵐の音も耳にとまらず、劍の如き寒氣も覺えず、時間も忘れ、場所も忘れ、我手

足の何處にあるらんも覺えず、はては自體の存在すらはつきりしなくなつた其時？何物の怪か、ドーッとばかりに五體の上へ落ちて來た。「はつ！」と氣注いて我に返ると共にか、驚いて起上りかけたがなか〳〵如何してなか〳〵起つことは能きない。墜ちて來た怪物は强風の爲に搖落された樹上の積雪であつた。僕は全身に浴びた雪を振ひ落さうとして、漸つと自己の手足の存在に心づいた。否、五體のあることに氣が注いた。僕は凍死して居たのであつた。もう一刹那で全然脈が止がつて了ふところを、崩雪の爲に蘇へらされたのであつた。崩雪は中齋先生の靈ではあるまいか。斯くて僕は猛然たる生の執着に襲はれた。瞬刻限も斯うした死地に居るのに堪へなくなつた。しかし既う周圍は眞暗で怎うすることも能きない。月も星もマサカこの凄まじい暴颱に吹消されたのでもあるまいが……僕は吹飛ばされさうな風を避けて、辛くも殘つた五七本のマッチを摩つたが、點くより消える方が早いといつたていたらく、到頭殘りは一本になつて了つた。さあ此の一本が生命の綱だ。これを無難に點火し了せねば

金剛杖と此處に心中せなければならない。

『南無大鹽大明神……』

願くば慈悲を垂れ給ひて、僕が危難を濟はせ給へ、助へ給へ……と覺えず大地に平伏して、一心に中齋の靈を念じた。

最後のマッチ（終）

跋

岡田君は會體の知れない人であると共に、至つて箇性の明確した人である。弱い弱い人であると共に恐ろしく強い人、恐さうに見えて極めて優しい人である。呪ひに涙を包み怨に愛を潜ばせた人である。俗人にして高士であり、通人にして至人、商人であつて學者町人であつて僧侶、左樣眞實の意味に於ける僧侶である。毒煙渦卷く市の中に隱れた行者である。しかし會へば會ふ程、解らぬところに、却つて徹底的本質の輝く君としては、否解らねば解らぬほど懷かしさの加はる君としては、刻々臨終と云はんか一刹一殺と申さうか

向上努力、求道精進の心劍に鬼觸るれば鬼を斬り神觸るれば神を斬り、セガンチニーがアルプスを登つたやうに、歩々高處に到らんとする君としては、ゲラ摺を見せる毎に、噴泉の水がセンダリ〳〵代謝るやうに、ガラリと文句を變へて了ふ。再校を求むれば再變し三校を示せば三變するは愚か、果ては白紙と摺換へて、校正といふことは活字を原稿に對照して其誤を訂すだけのことと思つてゐる我等を呆然たらしめられるのは、然あるべき事であつて「紙中一字無きに到りて、初めて眞の名文である」との古名人の言意も偲ばれるではないか。亦白紙以上の名文も古來稀であらう「千餘年撞かぬ巨鐘も鳴らせば力強い沈默の雄音が、千古の秘密と共に破れて了ふ。物言へば人も

姿は消えて了ふ」と語ること、書くことの好きな君が、自著の刊行を避けたがるのも無理ではない。然し刷上つたところを見ると、矛盾と撞着の鉢合はせかに思はれて居たいろんな問題のおの〳〵が所謂赤色に赤光、青色に青光ありで、篇々特異の色彩に閃〳〵と同時に、君獨自の有つた白熱的信仰、君の所謂無信仰的信仰の白熱に融和されて各篇合して玲瓏たる白光と輝き亘り、一指觸るれば忽ち電波の如く全身を痲痺せずには措かない。華嚴の事々無礙、法華の三諦圓融は理論のみ、一多相入、一卽一切の哲理を行實の上に證する自由な、大膽な、而して眞摯な岡田君の腦の腦から泌み出る苦惱の呻き、血と涙に燃ゆる白熱は、マサカ弘法日蓮の赤熱と親鸞道元の潛熱の融合され

たものとは思へぬまでも、何故とも覺らしく碎きし骨を、何故とも覺らで生命を懸けて探れ索められる中壽の靈火であるに相違ない。

大正十一年五月十二日

木崎愛吉

大正十一年六月一日印刷
大正十一年六月五日發行

定價金二圓八十錢

著者　岡田播陽
發行者　山田榮治　大阪市東區森之宮西之町六〇一
印刷者　堀越幸　日本印刷製本株式會社代表者　大阪市西區阿波座二番町一

發行所　大阪市東區玉造清堀町十六番地　好尚會出版部
發賣元　大阪市東區瓦町四ノ六〇　振替口座大阪七四三番　電話本局二〇四九番　盛文館

版權所有

最後のマッチ

©日本印刷製本株式會社印行©

落